

チレボンサルタン国の歴史

以下はインドネシア語版の Wikipedia の内容を和訳編集したものである。元原稿とは文章構成が異なるので、インドネシア語の教材としては使わないこと。

https://id.wikipedia.org/wiki/Kesultanan_Cirebon

尚、脚注と挿入図などは編者が行ったものである。

また底本である wikipedia の文章にはいくつかの矛盾点があったので、編者が訳文に訂正を加えた。

目次

1.	チレボンサルタン国前史.....	1
2.	チレボン(Cirebon)サルタン国の草創期	
2.1	キ・グデ・タパ (Ki Gede Tapa).....	2
2.2	ブラタレガワ (Brataegawa).....	2
2.3	ムアラ・ジャティ(Muara Jati)港における金銀銅貨.....	2
2.4	鄭和提督との友好関係とムアラジャティ灯台、クン・ウ・ピン(Kung WuPing)モスク.....	3
2.5	グドン・ウィタナ(Gedung Witana)の建設.....	4
2.6	キ・グドン・アランアラン (Ki Gedemg Alang-alang).....	4
2.7	ジャラグラハン (Jalagrahan)祈禱所の建設.....	5
3.	チレボンサルタン国の建国	
3.1	チャクラブアナ(Gakrabuana)候とアグン・パクンワティ' Agung Pakungwati)大臣 (1430-1479).....	6
4.	チレボンサルタン国の発展と支配地域の拡大	
4.1	スナン・グヌンジャティ(Sunan Gunung Jati).....	7
4.2	チレボンサルタン国通貨としてのディナール金貨とディルハム銀貨.....	8
4.3	チレボンの硬貨ピチス(Picis).....	8
4.4	クニガンヘ(Kuningan)のイスラム布教と同国の王子の知事任命.....	9
4.5	チレボンサルタン国の拠点の設置とカラワン(Karawang)のピサガン(Pisangan)とスダリ(Sedari)村落	9
4.6	デマツ(Demak)からのガメラン・スカハティ (Gamelang Suka Hati)の到来.....	10
4.7	バンテンへ(Banten)のイスラム布教とバンテンサルタン国の建国.....	11
4.8	バンテン支配の背景.....	11
4.9	バンテンの支配.....	14
4.10	バンテンの統一.....	15
4.11	ランポン(Lampung)の支配.....	15
4.12	バンテンサルタン国の建国.....	15
4.13	1527年のスンダ・クラパ(Sunda Kelapa)の支配.....	16
4.14	ポルトガルからの支援の遅延.....	17
4.15	1528年のラジャガルー(Rajagaluh)の支配要求.....	18
4.16	パリマナン(Palimanan)の戦.....	19
4.17	1528年のカワリ(Kawali)の支配.....	20
4.18	モハンマド・アリフィン(Mohammad Arifin)候へのサルタン地位の移譲.....	20
4.19	1529年のタラガ(Talaga)併合.....	20
4.20	1530年のスメダン(Sumedang)王国併合.....	21
4.21	パジャジャラン(Pajajaran)王国との和平協定.....	22

4.22	スナン・カリジャガ(Sunan Kalijaga)のデマツへの招致	22
4.23	モハンマド・アリフィン侯の暗殺.....	23
4.24	モハンマド・アリフィン侯の死去に伴う会議	24
4.25	バンテンとチレボン両サルタン国間の属領の分割	24
4.26	ファタヒラー(Fatahillah) (1568-1570)	25
5.	チレボンサルタン国の繁栄と対外友好関係の頂点	26
5.1	サルタン・ザイヌル・アリフィン(Zainul Arifin)/パヌンバハン・ラトゥ(Panembahan Ratu) I 世 (14570-1649).....	26
5.2	マタラム(Mataram)サルタン国とチレボン市内のスロジャ(Seroja)砦の構築.....	27
5.3	チレボンの少額硬貨のケプン(kepeng).....	29
5.4	ハリスバヤ(harisbaya)事件	29
5.5	他地域との商業活動.....	30
5.6	チレボンでの中国貨幣	30
5.7	シガ・バロン(Singa Baron)牛車の製作	32
6.	マタラムサルタン国との関係緊張とチレボン戦争、サルタン・アブドゥル・カリム(Abdul Karim)の死去	
6.1	チレボン戦争	33
6.2	サルタンマウラナ・ムハマッド(Maulana Muhammad)の時代.....	33
6.3	サルタン・アブドゥル・ムファキル(Abdul Mufakir)の時代	34
6.4	ジャヤカルタ(Jayakarta)国の空位とオランダの侵入	39
6.5	オランダのバンテンにおける交易独占	43
6.6	サルタン・アブドゥル・カリム (Abdul Karim)/パヌンバハン・ラトゥ II 世 (1649-1666)	43
6.7	ワンサクルタ(Wangsakerta)侯による代理統治	44
6.8	カラワンのオランダへの割譲	45
6.9	スメダンのクスマディラタ IV 世/ランガ・グンポルがカラワンの所有権を主張	46
6.10	カラワンへのオランダ遠征隊派遣	47
7.	バンテン国ゲリラ、ヤコブ・バン・ディク使節、チレボン王国の分割	
7.1	トゥルノジョヨ軍の攻撃とマタラム代理国への反撃	48
7.2	チレボンのサルタン・アブドゥル・カリムの子供たちのサルタン就任	48
7.3	ライクロフ・フォン・フーンズ使節がバンテンサルタン国を崩壊させる.....	49
7.4	対等関係と 1681 年協定でオランダが侵入	49
7.5	バンテンサルタン国のインドラマユのオランダ倉庫襲撃	49
7.6	ヤコブ・バン・ディクと 1680 年のオランダ書簡	50
7.7	ハジ・バンテン侯とチレボンでのゲリラ活動の終息	50
7.8	1682 年協定.....	51

8.	植民地時代と独立	53
9.	文化の中心としてのチレボンサルタン国	54
10.	歴代のチレボンサルタン.....	55

第1章 チレボンサルタン国前史

チャリタ・プルワカ・チャルバン・ナガリ (Garita Purwaka Caruban Nagari=チレボン国古事記)とババツ・タナ・スンダ (Babad Tanah Sunda=スンダ国歴史物語)とアチャ(Atja)文書を考察の基礎とするスレンドラニングラツ (Sulendraningrat)の説によると、チレボン(Cirebon)はキ・グドン・タパ(Ki Gedeng Tapa)が小さい集落として始め、それがやがて発展してチャルバン(Caruban)と名付けられた。チャルバンとはジャワ語で「混在」を意味し、各地からいろいろな種族、習慣、言語更には異なる目的を持って出稼ぎにやってきた人々が住み着いたことから名付けられたものである。

14 世紀になると、ガルー(Galuh)王国のバラタレガワ(Balatalegawa)侯がイスラムに入信し、同地域の住民と共にチャルバンに移住したことからチレボンが西ジャワにおけるイスラム布教の中心地となった。

チレボンの草創期に住み着いていた人たちの出稼ぎの主目的は漁業であり、トラシ(Terasi=魚醬)や干し魚の製造と製塩業とともに魚と小エビ(rebon)を取る仕事が盛んになった。この小エビから作った魚醬の名前から、小エビの町(Ga-rebon チャルボン)と名付けられ後日チレボンと呼ばれるようになった。

港湾の発展と内陸部の天然資源の助けを得てこの町は大都市に成長し、インドネシア国内のみならず諸外国との通商のためのジャワ島北岸の最重要都市の一つに成長した。

第2章 チレボンサルタン国の草創期

2.1 キ・グドン・タパ

キ・グドン・タパはジャワ島西部にあったシン・アプラ(Sing Apura)王国の宰相であった。隣国のスランタカ(Surantaka)王の一人娘であるニ・アンブツ・カシ(Nyi Ambet Kasih)がシリワギ王国のデワタプラナ¹(Dewataprana)王子と結婚後に王権の継承者がいなくなったため、キ・グドン・タパがチレボンの港湾監理を行うようになった。

2.2 バラタレガワ

当時のガルー王国の都であったカワリ(Kawali)²はヒンドゥー教の影響が大変強かったので、ガルー王国のブニソラ(Bunisora)候の子供であったバラタレガワはチレボンでイスラムの布教をするために同地に住み着いた。証人としてバラタレガワもチレボンの経済発展に寄与し、チレボンはガルー王国産品を輸出する門戸となった。

2.3 ムアラ・ジャティ(Muara Jati)港³における金貨と銀貨、銅貨

スラバヤで行われた第12回の国際イスラムコンファレンスで「公正を基にしたイスラム交易の再考⁴」という題で自説を発表したマスドゥキは、ディナール金貨とディルハム銀貨、フルス銅貨がキ・グドゥン・タパの時代に流通していたとその中で解説している。すなわち、当時すでに諸外国から多数の船がムアラ・ジャティ港に寄港していたことを示している。

¹ Jayadewata 王の別名

² Ciamis と Kuningan の中間に位置する地域

³ グヌンジャティ墓地の南側を流れる川の港

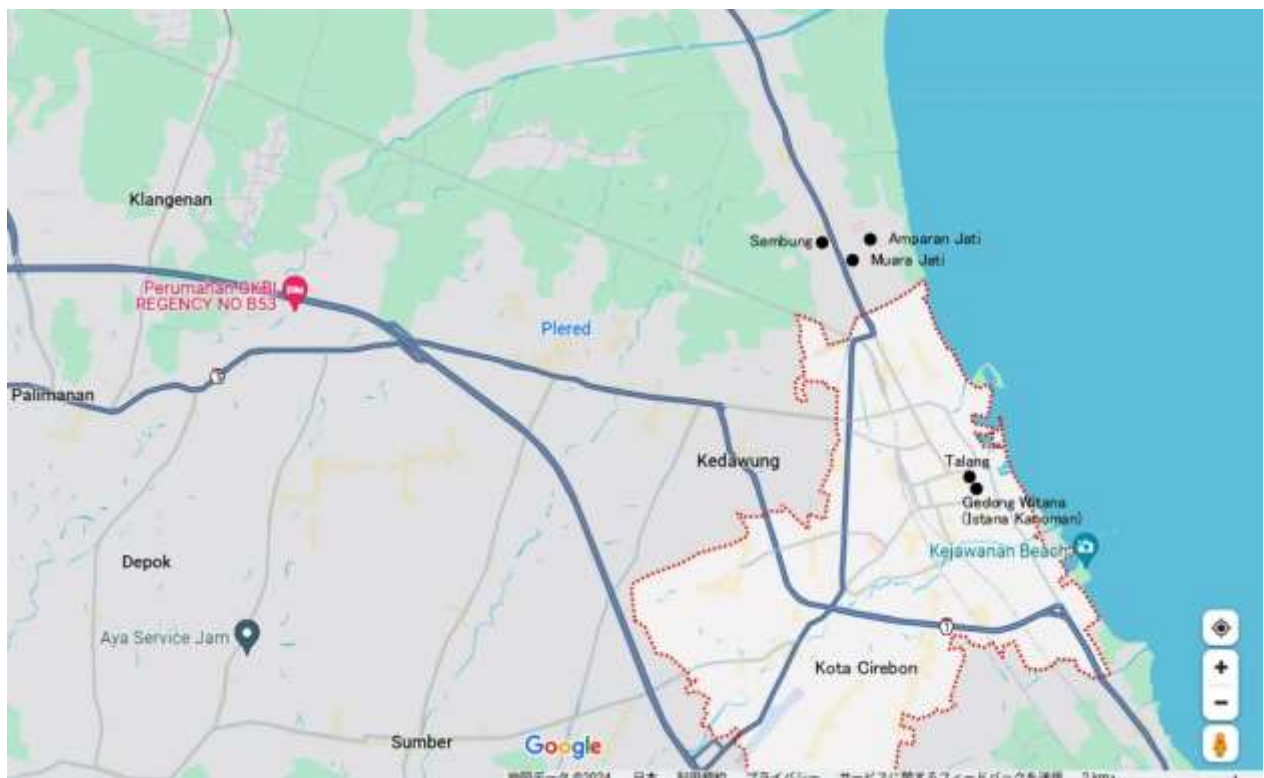
⁴ Mengembalikan Perdagangan Islam yang Berkeadilan

2.4 鄭和提督との友好関係とムアラ・ジャティ灯台、クン・ウ・ピン(Kung Wu Ping)モスク

鄭和は 1415 年にムアラ・ジャティ港に寄港しキ・グドゥン・タパに歓迎を受けた⁵。今でもカスプハン王宮に保存されているイスラムの聖句が書かれた絵皿を鄭和は寄贈した。鄭和とその部下たちはこの地域の人たちと交流し、陶器の製造や漁業のやり方、港湾監理の方法を伝授した。鄭和軍の司令官であるクン・ウ・ピンはムアラ・ジャティ港のための灯台を建設することを鄭和に進言し、この灯台はアンパラン・ジャティ⁶の丘の上に建てられた。



鄭和提督が寄港した当時、金貨と銀貨は国際交易の基本通貨となっていたので、上記の金銀貨は交易のために流通していたことは確実である。



⁵ 鄭和提督は雲南省出身のムスリムであり、当時からチャンパ王国を通じて雲南省とジャワとの関係が深かったことによる。

⁶ Amparan Jati の丘。Sembung にある Gunung Jati 墓地から国道を挟んだ東側の丘のことだろう。

イスラム華人はこの灯台付近のスブン(Sembung)とサリンディル(Sarindil)、タラン(Talang)⁷地域にモスクと共に居住地域が定められた。サリンディル地区の住民には船舶修理のための木材調達、タラン地区には港湾の維持管理が、スブン地区には灯台の維持管理が義務付けられた。またこれら三カ所の華人住民には、現在孔子廟になっているタランモスクの維持管理と船舶への食糧供給義務が課された。



Talang 廟

2.5 グドン・ウィタナの建設

シリワギ王国のワランスンサン(Walangsungsang)候とララ・サンタン(Rara Santang)姫の兄妹がイスラムをより深く学ぶためにチレボンに滞在した時⁸、現在のカノマン(Kanoman)宮殿の場所にグドン・ウィタナと呼ばれる住居を 1428 年に建てた。チレボンで十分な



Walangsungsang

イスラム教育を受けた彼らはメッカ巡礼に旅立ったが、ララ・サンタン姫はアラブの領主と結婚したため兄のワランスンサン候と一緒に帰国しなかった。ワランスンサン候の帰国後、彼が夢に描いた国家建設の緒端として新しい村のための土地を開墾することを彼の師ダトゥ・カフィ(Syekh Datuk Kafi (Nur Jati)から依頼されて、何か所からの候補地から新しい村はクボン・プシシル⁹(Kebong Pesisir)に建設されることに決定された。

2.6 キ・アゲン・アルンアルン(Ki Ageng Alun-alung)

伝承によると、同地区にすでにキ・ダヌスラ(Ki Danusela)夫妻が居住していて、この人が初代のチャルバンの名誉村長として住民たちから推挙された。キ・アゲン・アルンアルンと称したキ・ダヌスラはワランスンサン候とキ・グドン・タパの娘であるニ・マス・スバンララン(Ni Mas Subang Larang)別名スバンクラ

⁷ 現在のチレボン旧市街と思われる。語源は「大人」

⁸ この兄妹はシリワギ王の第二夫人(イスラム教徒)の Nyi Subanglanag 妃の子であったため、ヒンドゥー教徒の王はこの母子を差別した故に出国してチレボンに居ついた。

⁹ チレボンの王宮から 1km 付近にある旧市街のことと思われる

ンジャンに村長代理として取り立てられた。同名誉村長の没後にチャクラブミ(Cakrabumi)と称したワラン
スンサン候は二代目の村長になりチャクラブアナ(Cakrabuana)候と称した。

2.7 ジャラグラハン(Jalagrahan)祈禱所の建設

クボン・プシシル村長としてキ・アゲン・アルンアルンが村を取り仕切っていた時、ワランスンサン候の
発案でこの地域で初めての祈禱所が設けられてジャラグラハン祈禱所と名付けられた。

第3章 チレボンサルタン国の建国

3.1 チャクラブアナ候とアグン・パクワギ宰相 (1430-1479)

上記のワランスンサン候には同腹のララ・サンタン姫と、別腹のキアン・サンタン(Kian Santang)王子がいた。ワランスンサン候は母親から伝わったイスラム教を奉じていたので、長男とは言えども王権を継承する権利を有していなかった。というのは 15 世紀当時、パジャジャラン王国では祖先を崇拝するスダ・ウィウイタン(Sunda Wiwitan)と呼ばれる仏教・ヒンドゥー教が主流の宗教であったからであった。ワランスンサン候の代わりにシリワギ王国の王と第二夫人であるニヤイ・チャントリン・マニクマヤン(Nyai Cantring Manikumayang)との間の男子のスラウィセサ(Surawisesa)が王になった。



スラウィセサ皇太子

「スダの歴史物語(Sejarah Babad Tanah Sunda)」中でスレイマン・スレンドラニングラツによると、メッカ巡礼後にハッジ・アブドゥラー・イマン(Haji Abdullah Iman)と呼ばれるようになったワランスンサン候はエジプトからの帰国後には妹のララ・サンタン姫の夫であるサルタン・フツ、別名マフムード・アシャル・キブティ(Mahmud Asyar al-Qibthi)の庇護を受けた。この義理の弟は「千枚の銀貨」という意味のシャリフ・アブドウラとしても知られている。

ワランスンサン候はクボン・プシシルにクタ・コソド(Kuta Kosod)という名の小さい村落を作り、アグン・パジュンワティ(Agung Pajungwati)を領を立ち上げてして 1430 年にチレボンに政権を樹立したので、チレボンサルタン国の創始者はワランスンサン候であると考えられている。パクワギ王宮から采配を振ってチレボン住民にイスラムを布教したのはこの初代王として歴史に登場したワランスンサン候であった。

このチレボンサルタン国の建国はデマツ・サルタン国の存在と深い関係があった。

ワランスンサン候は 1529 年に没し、現在はグヌンジャティと呼ばれているスンブン山のチレボンの王族墓地に葬られた。

第4章 チレボンサルタン国の発展と支配地域の拡大

4.1 スナン・グヌン・ジャティ(Sunan Gunung Jati)別名シャリフ・ヒダヤットウラ(Syarif Hidayatullah)

スナン・アンペル¹⁰(Sunan Ampel/Sunan Ngampel)がスラバヤで没した後、イスラム伝道者・ワリソゴの後継者を定める会議が 1427 年に東ジャワ州のトuban(Tuban)¹¹で開催され、シャリフ・ヒダヤットウラ Syarif Hidayatullah、別名スナン・グヌン・ジャティ、が継承者に選出された。これ以来、ワリソゴの活動拠点はチレボンのスンブンに移り、ここは世界の中心 Pular Bumi と呼ばれるようになった。



Bong Swi Hoo
Sunan Ngampel

1427 年にワランスンサン候は甥であるシャリフ・ヒダヤットウラにチレボンの支配者としての地位を委譲した。シャリフ・ヒダヤットウラはワランスンサン候の妹であるララ・サンタンとエジプト人のシャリフ・アブドゥラとの間にできた息子であり、権限移譲の前にワランスンサン候とニヤイ・エンダン・グリス(Nyai Endang Geulis)との間にできた娘であるニマス・パクワギ(Nimas Pakuwangi)と結婚していたのでワランスンサン候の娘婿でもあった。シャリフ・ヒダヤットウラは死後グヌン・ジャティ王族墓地に葬られたのでスナン・グヌン・ジャティと呼ばれているが、生前はシャリフ・ヒダヤットウラ・ビン・マウラナ・サルタン・ムハマッド・シャリフ・アブドゥラ(Syarif Hidayatullah bin Maulana Sultan Muhammad Syarif Abdullah)と称し、これとは別にインカン・シヌフン・カンジェン・ススフナン・ジャティ・プルバ・パストゥプ・パナタガマ・アウルヤ・アッラー・クトゥビツ・ジャマン。カリファトール・ラスルルラー(Ingkang Sinuhun Kanjeng Susuhunan Jati Purba Panetep Panatagama Awliya Allah Kutubit Jaman Khalifature Rasulullah)とも称していた。

シリワギ王ジャヤ・デワタ(Jaya Dewata)と結婚する前にイスラムに入信していた祖母のニヤイ・スバン・ララン(Nyai Subang Larang)と同様に、祖父である同王にイスラムに入信するようシャリフ・ヒダヤットウラはワリソゴの連盟を通じて働きかけてはいたが、アルヤ・チレボン(Arya Cirebon)の著作プルワカ・チャルバン(Purwaka Caruban)にあるように、ガルー王国とスダ王国が統一されていた 1428 年にはその

¹⁰ ワリソゴの一人でスラバヤ付近で布教活動を始めた雲南人。漢字では彭瑞和(ボン・スイホー)

¹¹ この当時の国際貿易港の一つ

努力は結実しなかった。

1482年4月2日、パクアン・パジャジャラン(Pakuan Pajajaran)の支配者であるシリワギ王に対し、今後一切チレボンは上納金を治めないことをついにシャリフ・ヒダヤットウラは通知した。この通知にはチレボン各地の領主が賛同した。

デマツ・サルタン国との連携を強化するために双方のサルタン国間で以下の政略結婚が行われた。

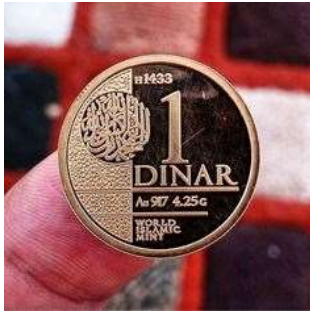
- マウラナ・ハサヌディン(Maulana Hasaduddin)王子とラトウ・アユ・キラナ(Ratu Ayu Kirana)王女
- ジャヤクラナ(Jayakelana)王子とラトウ・アユ・ポンバユン(Ratu Ayu Pembayun)王女
- ブラタクラナ(Bratakelana)王子とラトウ・ニャワ(Ratu Nyawa)別名ラトウ・アユ・ウラン(Ratu Ayu Wulan)王女
- ラトウ・アユ王女は1518年にデマツのサルタンに就任したユヌス・アブドゥー・カディル(Yunus Abdul Kadir)、別名サブラン・ロール(Sabrang Lor)候と1511年に結婚。

このようにチレボンサルタン国の創建と急速な発展はシャリフ・ヒダヤットウラによって開始された。シャリフ・ヒダヤットウラはチレボンとバンテンサルタン国王族の先祖として、さらには西ジャワ州のマジャレンカ、クニガン、カワリ(ガルー)、スندا・クラパ¹²、バンテンでのイスラム布教者として崇敬されている。

4.2 チレボンサルタン国通貨としてのディナール金貨とディルハム銀貨

1400年代にチレボンサルタン国は国内決済通貨として下の写真に示すディナール金貨とディルハム銀貨を指定した。

¹² 現在のジャカルタ特別州北端にある現在でも内航船に使われている港。



ディナール Dinar 金貨



ディナール Dinar 金貨



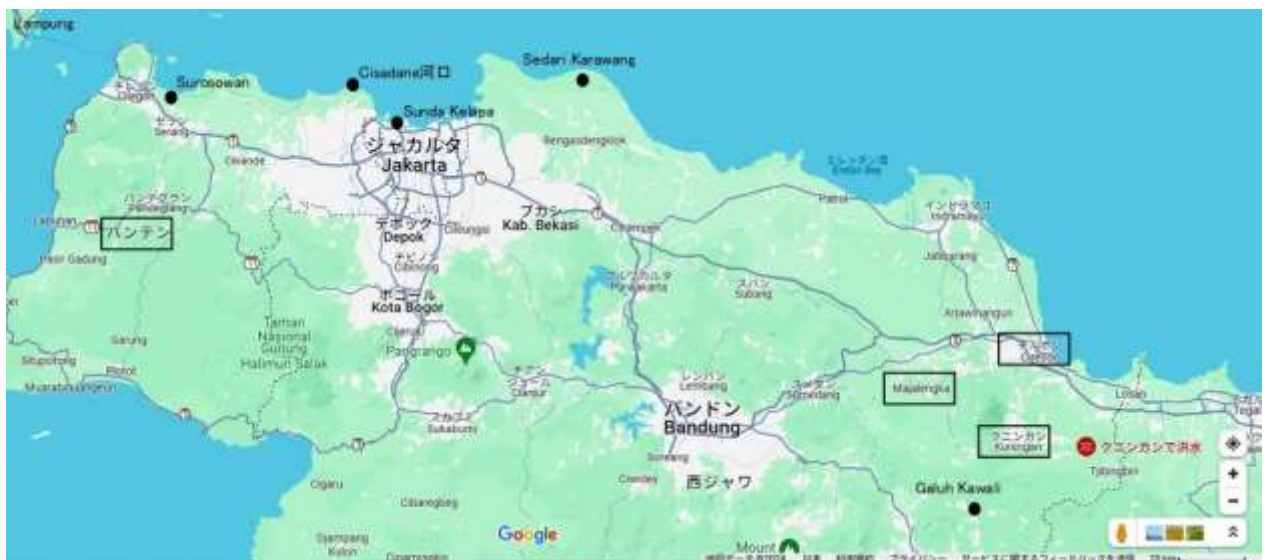
ディルハム(Dirham)銀貨

4.3 チレボンの硬貨ピチス Picis

チレボンサルタン国の発展初期、同地域は通商路として名高く、ピチスという錫製の貨幣が流通していた。

4.4 クニガン(Kuningan)へのイスラムの布教と同国の王子の知事任命

クニガンへのイスラム布教は説得力のある方法で実施され、ルラゲン(Luragun)地域のキ・グデ・ルラゲン(Ki Gede Luragun)の協力で軌道に乗り、1481年9月1日にはシャリフ・ヒダヤットウラが、キ・グデ・ルラゲンを養子にした。この養子はクニガン王、あるいはサンクル(Sangkulu)とクニガンでは呼ばれていて、チレボンサルタン国のクニガン知事に任命された。



4.5 チレボンサルタン国の拠点の設置とカラワン(Karawang)のピサガン(Pisangan)村とスダリ(Sedari)村

1518年にシャリフ・ヒダヤットウラはカラワン県の海岸近くにある現在のピサガン・スダリ村付近に村

落を作るために自身の生徒であったクドゥス(Kudus)出身のジャナプラ(Janapura)を派遣した。この村落は後日、ジャワ島北海岸におけるチレボンサルタン国の拠点となった。

ジャナプラが最初に建設したのはピサガン村であり、その10年後に彼の娘であるデウィ・ソンドリ(Dewi Sondari)とアンディダリ(Andidari)が同地を訪問した。シーク・ジャナプラとして知られるようになったジャナプラは1528年に現在スダリと呼ばれているタンジュン・スウン(Tanjung Suwung)地区のイスラム化の特命を受けた。同地区には当時タラガ(Talaga)国からの逃亡者が住み着いていて、シーク・ジャナプラは同地のイスラム化を成功させたとともに同地を発展させた。

カラワンの歴史学者のザカリア・フセイン(Zakaria Husein)によると、この成功談はクドゥスまで拡散され、その直後にスナン・クドゥス(Sunan Kudus)の一族であるイマニラ(Imanilah)侯はデウィ・ソンドリと結婚するためにクドゥスに帰還させた。このことからシーク・ジャナプラはスダリという名で知られている村名をソンドリと改名した。同歴史学者の収集資料によると、シーク・ジャナプラは1587年に没するまで同地域に居住し、死後は海岸近くに埋葬されたとのことである。

4.6 デマツからのガメラン楽団スカハティ(Sukahati)の到来

デマツの二代目のサルタンのサブラン・ロールの死後、ポルトガルがマラッカを攻撃した1521年にチレボンの初代サルタンシャリフ・ヒダヤットラの娘のラトゥ・アユ(Ratu Ayu)でサブラン・ロールの妻がデマツからチレボンにスカハティと呼ばれるガメラン楽団を亡父の記念として持参した、とスレイマン・スレンドラニングラツはチレボンの歴史書で述べている。

チレボンでも同時期に独自のガメランを有していたが、チレボンの文化人はスカハティの銅鑼がデマツからチレボンに持ち込まれた最初のガメラン楽器であると固く信じている。チレボン語ではスカハティの銅鑼(gong)奏者に魅了された人たちを Suka(h)at(ia)n から転じて市内ではスカトゥン Sukaten と、チレボン郊外では Sukaten 呼ぶようになり、現在に至ってもゴン・スカティ・チレボンはチレボンの王宮でしばしば聞かれている。

4.7 バンテンへのイスラム布教とバンテンサルタン国の建国

シャリフ・ヒダヤットウラがチレボンに来た初期に、ワランスンサン候と共に当時ワハンテン(Wahanten)と呼ばれていたバンテン地域でイスラムを布教する機会を得て、シャリフ・ヒダヤットウラが同地での布教中に「ジハード(戦争)の意味は敵対する相手だけではなく自分の欲望との戦いでもある」と解説したことでワハンテン地域の住民と領主の心をとらえた。当時ワハンテン地域にはワハンテン・パシシル(Wahanten Pasisir)と呼ばれた海岸地域とワハンテン・ギラン



Jayadewata 王

(Wahanten Girang)と呼ばれた内陸地域を治めていた二人の領主がいた。二人はジャヤデワタ(Jayadewata)王の息子であり、前者はサン・スロソワン(Sang Surosowan)で、後者はアルヤ・スランガナ(Aya Suranggana)であった。

海岸地域で同地の領主の娘ニヤイ・カウン・アンテン(Nyai Kawung Anten)と知り合い、後日二人は結婚して二人の子供を得た。一人目は 1477 年に生まれたウィナオン(Winaon)姫で、二人目は 1478 年に生まれたマウラナ・ハサヌディン(Maulana Hasanuddin)王子であり、この王子を祖父であるサン・スロソワンはサバキンキン(Sabakingkin)と名付けた。サン・スロソワンはイスラムを信仰していなかったが、領地に到来するイスラム信者に対しては大変寛容であった。

Sultan Maulana Hasanudin Banten
Pendiri Kasultanan Banten

シャリフ・ヒダヤットウラはその後の 1479 年にチレボンのサルタンとしての職務を行うためにチレボンに帰還した。

4.8 バンテン支配の背景

サブラン・ロール候¹³とシャリフ・ヒダヤットウラの娘ラトウ・アユの結婚は 1511 年に行われた。サブラ

¹³ 別名 Yat Sun, 逸孫、Raden Surya



Yat Sun
Sultan Yunus

Sabrang Lor

ン・ロール侯が 1518 年にデマツのサルタンに就任した後、デマツ王国の海軍総司令官(Senapati Arjawala)としてサブラン・ロール侯は一時期チレボンに滞在した。

チレボンとデマツサルタン国の同盟はパクアン(Pakuan)にいたジャヤデワタ(Jayadewata)シリワギ王の不安をあおった。そこで、サムドゥラ・パサイ(Samudera Pasai)国のマラッカ攻略を退けたポルトガル軍の司令官であるアフォンソ・アルブケルケ(Afonso Albuquerque)と連絡を取るために、同王は自身の皇太子であるスラウィセサ(Surawisesa)をマラッカに派遣した。

子であるスラウィセサ(Surawisesa)をマラッカに派遣した。

1513 年にポルトガルの航海士トメ・ピレス(Tome Pires)はバンテンで多数のムスリムと出会ったと航海日誌に記載している。

シャリフ・ヒダヤットウラが息子のマウラナ・ハサヌディンと共にしたメッカ巡礼の帰路に彼らはバンテンで礼儀正しく、親しみを込めて、人々を救済しようとダクワ(説法)を行った。この説法に賛同した人々の一部は自主的にイスラムに入信し、イスラムの道を進むことになった。



Afonso Albuquerque

このダクワによりシャリフ・ヒダヤットウラはヌルルアラ師(Syekh Nurullah=アッラーの慈光を持った導師)という名で有名になった。このダクワをこの息子が継承し、ワハンテン奥地のパンデグラン(Pandeglang)にあるピロサリ(Pilosari)山に至るまでの地域である、カラン(Karang=サンゴ)山、ロール(Lor=北)山、ウジュンクロン(Ujung Kulon=最西端)からパナイタン(Panaitan)島¹⁴に至るまでの地域のイスラム指導者たちへのダクワのために約 10 年間同地にとどまった。同王子の談話の手法は父王のものと同様であった。

1521 年になってシリワギのジャヤデワタ王は、同地の商人たちがイスラム商人と接触することでイスラムを受け入れるという影響を最小限にするために、スンダ国の諸港に寄港するイスラム商人たちを制限し始めた。しかしながら、イスラム化という事実はこの目的達成の尽力をはるかに上回るものであ

¹⁴ ウジュンクロンの沖合のスンダ海峡にある島。

たので、上記の尽力は満足できる結果をもたらさなかった。この尽力に抗してイスラムの影響はスンダ王国内部まで入り込んだため、デマツサルタン国とチレボンサルタン国に匹敵する軍事力を持つべく、同年スンダ王国は同じ必要性を持つ国との同盟を締結しようと、同王はポルトガルと友好関係を結ぶことを決めた。

同年、上記の友好関係を実現するために同王はサミアム Samiam(スラウィセサ Surawisesa)皇太子をマラッカに派遣した。彼らはスンダ王国とポルトガルの友好関係が双方の利益になるとポルトガル人も考えていると信じ、同皇太子はスンダ王国内の港で胡椒などを自由に取引できるようにするとポルトガルに持ち掛けた。その見返りとして同皇太子はデマツとチレボンサルタン国がスンダ王国に攻め込んできた時にはいつでもポルトガル軍が支援してくれることを要望して、その証拠としてポルトガルが要塞を構築する権利を与えた。

1522年に、マラッカ駐在の総督アルフォンソ・アルブケルケは、拡張政策を取るチレボンサルタン国に対抗する目的でスンダ・クラパに城塞を構築するためにヘンリケ・レメ(Henrique Leme)をスラウィセサ王子のもとへ派遣した。

1522年8月21日にポルトガル人がスンダ・クラパとバンテンに城塞都市を構築し、さらにスンダ・クラパ港では必要物資を受領するという協定を締結した。

スラウィセサ王は友好の印としてポルトガル人に胡椒を1000籠と記念の石碑パドゥラウン(padrão)をこの出来事の記念とした与えた。この石碑はスンダの大衆に伝わる昔話ムンディンラヤ・ディクスマ(Mundinglaya Dikusmah)ではラヤン・サラカ・ジマス(Layang Salaka Domas)と呼ばれているものであり、1918年にジャカルタで発掘された。この協定に署名したのはスンダ側では名誉将軍(Padam Tumungo)と県令(Samgydepaty)、ポルトガル側は財務官



(e outre Benegar)並びに港湾長(e easy o xabandar)であった。署名した港湾長はブタウィ人¹⁵でイスラム

¹⁵ ジャカルタの原住部族

教徒のワツ・イテム(Wak Item)であったので、彼はアラビア語の「و ワウ」と「كカーフ」の文字で署名した。

上述のパドゥラウン石碑は 1918 年にジャカルタのプリンセン通り Prinsemstraat(現在のチェンケ Cengkeh 通り)とグルネ通り Groemestraat(現在の東ヌラヤン Nelayan Timur 通り)の交差点で発掘され再度日の目を見ることになった。

4.9 バンテンの支配

1522 年にマウラナ・ハサヌディンはスロソワン宮殿と宮廷前広場、市場、モスクを同時にパチタン(Pacitan)地区に建設した。1519 年にスロソワン王が没した後のワハンテンの領主はその息子であり、マウラナ・ハサヌディンの叔父にあたるアルヤ・スララジャ(Arya Suraraja)になった。新領主は海岸地域を 1526 年まで支配したと考えられている。



Masjid Agung



Surosowan 宮殿の遺跡

1524 年にシャリフ・ヒダヤットウラがチレボンとデマツサルタン国の連合軍を率いてバンテン港を訪れた。この時バンテン海岸地域がこの連合軍を迎え撃ったという事実はなく、この連合軍はバンテン内陸部侵攻に照準を合わせた。

バンテン史によると、この連合軍が内陸部に達した時、内陸部の軍隊のキ・ジョンジョ(Ki Jongio)兵長が寝返って連合軍側についた。

伝承によると、同内陸部の住民を含む社会の賛同を受けたマウラナ・ハサヌディンのダクワを批判した内陸部の領主のアルヤ・スランガナ(Arya Seranggana)はマウラナ・ハサヌディンに、闘鶏で同領主の鶏が勝ったらこのダクワを中止するという条件を提示した。結果的にマウラナ・ハサヌディンの鶏が闘鶏に勝って、ダクワを続ける権利を得たのだった。そのかわりに、アルヤ・スランガナとイスラム浸透に反

対する人たちは南部の森林に逃れることを選ぶことになった。

アルヤ・スランガナの没後、彼が住んでいた王宮は少なくとも17世紀末まで、イスラム領主たちの宿舎として使われた。

4.10 バンテンの統一

父王スナン・グヌン・ジャティの指示でマウラナ・ハサヌディンはその後内陸部にあった政治の中心地をスロソワン宮殿に移し、同時に海岸に都市を建設した。

スロソワン宮殿群は1526年に完成し、同年に海岸地区の領主アルヤ・スララジャは同地の支配権を自主的にスナン・グヌン・ジャティに委譲したことで、ついに海岸地区と内陸部が1526年10月8日頃に統一された。この国はチレボンサルタン国の一つの州となり、後日バンテンと呼ばれるワハテハンとなった。統一後にスナン・グヌン・ジャティはチレボンに帰還したため、バンテンの支配はマウラナ・ハサヌディンに任された。この事実から、フセイン・ジャヤニングラツのような一部の識者はスナン・グヌン・ジャティがバンテンの初代サルタンであるとの認識を持っているが、スナン・グヌン・ジャティはバンテンのサルタンになったことだけで一生を終えてはいなかった。

ジョアオ・ド・バロス¹⁶(Joao de Barros)の記録によると、この方、バンテンサルタン国支配下のバンテンとスンダ・クラパは諸外国船の到来ではますます反映したとのことである。

4.11 ランプン¹⁷の支配

1530年にチレボンはランプンを支配して同地はバンテンの勢力下にはいった。

4.12 バンテンサルタン国の建国

1552年にマウラナ・ハサヌディンは父王のシャリフ・ヒダヤットウラによってバンテンのサルタンに正式に

¹⁶ 16世紀のポルトガルの歴史家

¹⁷ スマトラ最南部の州

任命された。

4.13 1527年のスダ・クラパ占領

ポルトガルの記録では次のように述べている。スダ・クラパはチリウン川の中州で1~2kmの幅であり、この地点は河口に近く、沖合にはいくつかの小島が浮かんでいる。その河口には積載量100トンのマレーと中国の商船が10隻ほど入港しているのは確実である。これ以外に現在東インドネシアと呼ばれている地域からの船舶もあった¹⁸。しかしながら、積載500~1000トンの小型ポルトガル船は沖合に停泊しなくてはならない¹⁹。トメ・ピレスもスダの交易品は積載量約150トンの船で支障なく運送されていると述べている。

その後、拡張政策をとるチレボンに対抗するためにスダ・クラパに城塞を建設すべく、1522年にマラッカに駐在していたアルフォンソ・アルブケルケ総督はヘンリケ・レメをスダ王国のスラウィセサ王子の下へ派遣することを決定した。

同時期に、パサイ²⁰(Pasai)出身でチレボンの社会で信用されていたファタヒラー(Fatahillah)は、デマツの人達からも支持があることで有名であった。マラッカがポルトガル手中に落ちたため、彼はパサイからマラッカに移動しチレボンに来たのであった。ファタヒラーはイスラムの布教に喜んで協力したことで知られていた。デマツサルタンのサブラン・ロール侯の没後、ファタヒラーは故サブラン・ロール侯の妃であったラトウ・アユをチレボンで娶ったことでファタヒラーはシャリフ・ヒダヤットウラの娘婿となった。更にはチレボンのジャヤクラナ(Jayakelana)侯の死後、同妃アユ・ブンバユンと再婚した。

当時チレボンサルタン国の一つの州であったバンテンとチレボン、デマツの連合軍はマウラナ・ハサヌディンの指揮の下でスダ・クラパを攻略した。この前後にファタヒラーは自分の姻族であるマウラナ・ハサヌディンに対して、自軍だけで攻撃しないように要請していた。

¹⁸ インドネシアでは地方によって船の形が異なるので一目でどの地域の船舶かわかる。

¹⁹ 舵が船体の下に突き出しているため浅い海岸には近寄れない。

²⁰ 現在のアチェ州ロスマウエ郊外にあった王国。



ブタウィ人の歴史と文化の専門家であるリドワン・サイディ(Ridwan Saidi)はこの攻略についてこう述べている。1527年のスダ・クラパ攻略の際に同港の港湾長であるワツ・イテム側とファタヒラー軍が衝突したことで、守備側に20名の戦死者が出たとともにワツ・イテムも戦死して水葬された²¹。この戦闘後にファタヒラーは現在のパサール・イカン(Pasar Ikan 魚市場)地区に含まれているマンディ・ラチャン(Mandi Racan)にあった3000人のブタウィムスリムが住む村を含めて焦土作戦を行った後にファタヒラーはチリウン川の西に位置するカリ・ブサール(Kali Besar)の西岸に高い城壁に囲まれた宮殿を建てた。スダ・クラパは1527年6月22日にその全域が連合軍側の支配におちた。

4.14 ポルトガル支援の遅延

スダ・クラパ城塞構築の命令を受けたフランシスコ・デ・ザ(Fransisco de Xa)はポルトガル植民地の一つであったインドのゴア(Goa)の総督に抜擢されたために、ポルトガルの支援が遅れたことがイスラム

²¹ イスラム教徒は土葬が一般的で水葬にするのは例外的措置

側の勝利の一因となった。ゴアからスダ王国には城塞の建設資材を積載したフランシスコ・デ・ザが乗船した6隻のガレオン船は暴風に遭遇してスリランカ沖のベンガル湾で沈没したため数隻に積載した建設資材は放棄せざるを得なくなったが、フランシスコ・デ・ザは1527年にマラッカに到着した。

スダ・クラパへのポルトガル遠征軍はマラッカから出帆し当初バンテンに向かう予定であったが、バンテンは既にマウラナ・ハサヌディンの支配下に入っていたため、直接スダ・クラパに向かうことになった。チサダネ河口でフランシスコ・デ・ザは1527年6月30日にパドゥラウンを乗船させ、チサダネ川をリオ・デ・サンホルへ(Rio de São Jorge=セント・ジョージ川)と名付け



ガレオン船

た。その後、フランシスコ・デ・ザが乗船したガレオン船は単独で艦隊を離れたため、ドウアルテ・コエー



Duarte Coelho

リオ(Duarte Coelho)が指揮する二本マストの帆船だけがスダ・クラパに向けて出帆した。ドウアルテ・コエーリオはスダ・クラパ付近の地形の情報を得るのが遅すぎたゆえに海岸に近づきすぎたためファタヒラー軍の餌食となり、船は大破したとともに多数が戦死した後、ようやくこのポルトガル船はパサイに向

けて脱出することができた。

1529年にポルトガルはこの復讐戦として8隻を準備したが、1527年の戦闘の際の恐怖がドウアルテ・コエーリオ軍兵士に広まったために、現在ガーナの一部になっているポルトガル領アフリカの黄金海岸にあるペドゥに艦隊の行き先を変更した。

4.15 1528年のガルー王国のチレボン支配要求

チレボンサルタン国とガルー王国との関係悪化は、ガルー王国がこの地域の中心であること、すなわちチレボンサルタン国はガルー王国の一部であるとチレボンに認めさせることから始まった。

ガルーのチャクラニングラット(Cakraningrat)が最初に派遣した大使は、チレボン社会ではアルヤ・ビ

カン(Arya Bikan)として知られているキバン Kiban 別名パリマナン Palimanan²²の知事であった。この知事が率いる一行は何度もチレボンの都に入ろうとしたが毎回拒否され、都に入れたのはわずか数人のみであった。この数人も後日イスラムに入信することとなった。

この関係悪化の緒端は、チレボンサルタン国とガルー王国との間で、パリマナン地区がガルー王国の中で最も海岸に近い地域であるという点を問題視したことであった。パリマナン地区とは昔クドンドン(Kedongdong)と呼ばれた現在のチワリギン(Ciwaringin)とグンポル(Gempol)、パリマナン、ドゥクプンタン(Dukupuntang)の一部である。

このガルー王が二回目に派遣した大使は、上記の意図を記した書状を携えたディパサラ(Dipasara)の郡長であった。クニガンの領主でありシャリフ・ヒダヤットウラの養子となったキ・グデ・ルラゲン(Ki Gede Luragun)との面会を拒否されたため、同郡長はチレボンに入ることができなかった。それどころか、ガルーはチレボンサルタン国に服従せよという書状を持たされて彼ら一行はガルーに戻るよう要求された。

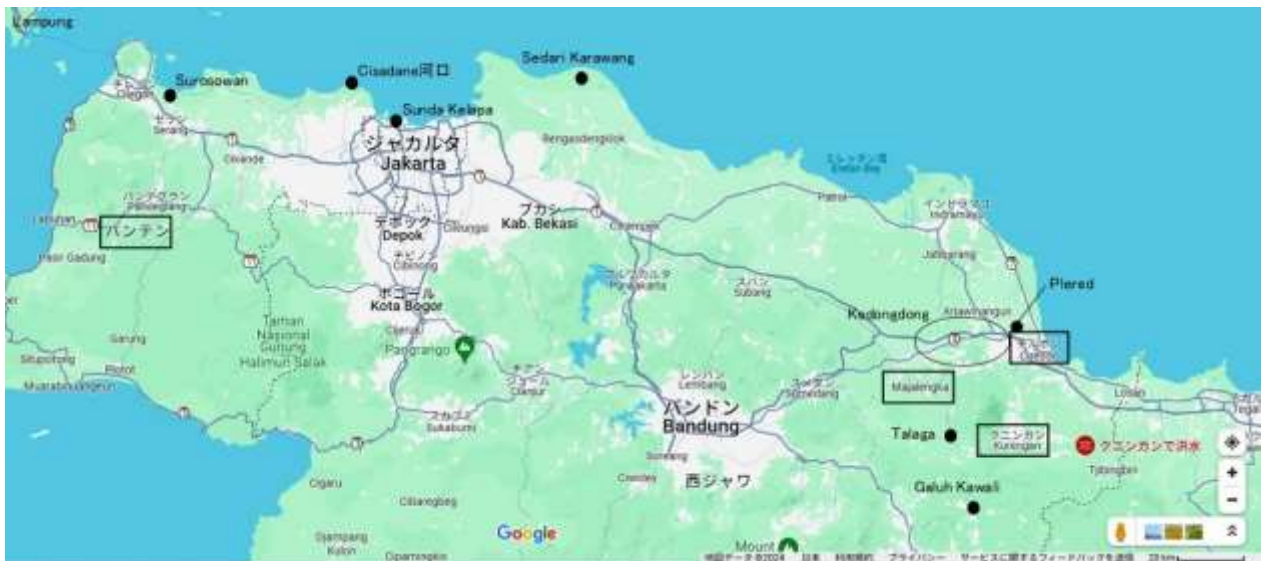
その後クニガンの領主はこの事案についてシャリフ・ヒダヤットウラに報告し、ガルー王国侵攻の許可を求めた。この侵攻の前にクニガンの領主はブレド(Plered)に砦を構築するとともに、ガルー王が国民とともにイスラムに入信し、チレボン王国と合併せよという書状とともにシガガティ(Singagati)の郡長をガルー王国に派遣したが、同王はこれを拒絶した。

4.16 パリマナンの戦

シガガティ郡長の帰国間もなく、クニガン領主のチレボン軍とキバンの領主のガルー軍を率いてパリマナンの戦いが始まった。ガルー軍側はサンヒヤン・グンポル(Sanhyang Gempol)率いるガルー王国の主力部隊で、チレボン軍側は同国の主力部隊に加えて折からチレボンに来ていたデマツサルタンの親衛隊の700名で構成されていた。

²² チレボン市西側にある現在の高速道路のインターチェンジ付近

この戦いではガルー側が敗れチレボン軍はガルーの都を目指し王宮を包囲し、チレボン軍が勝利しガルー王国はチレボンサルタン国に併合され、ガルー王国の支配者たちは王宮から脱出した。



4.17 1528 年のカワリ支配

上記の戦いの後、チレボンサルタン国はクニガンのランランブアナ(Langlangbuana)王の息子であるドゥンクツ(Dungkut)王子をガルーの領主として派遣した。

4.18 モハンマド・アリフィン王子へのサルタン地位の移譲

1528 年にシャリフ・ヒダヤットウラは息子のモハンマド・アリフィン王子にチレボンサルタン国の支配権を委譲し、シャリフ・ヒダヤットウラはイスラムの布教に専念することとなった。

4.19 1529 年のタラガ併合

タラガ国がチレボンサルタン国に併合されるきっかけは、チレボンの王子たちがタラガ国から隊列をなして練り歩いたチレボン軍とタラガ国の郡長との間の誤解であった。

デマツ軍が先導しチレボン軍がしんがりを務めていたチレボンのブラタクラナ王子とジャヤクラナ王子を奉じた隊列は意図せずタラガ国領内に入ってしまったことで騒ぎが始まった。タラガの住民はこのことを王宮に報告したため、同郡を治めていた領主が数人の兵士を引き連れてこの事件の調査に出た。

このタラガ国の領主と兵士はすぐにこの隊列に出逢い、最前列にいた兵士にこの顛末とタラガ領に

入る必要性について尋ねた。タラガの兵はスندا語で尋ねたのだが、最前列の兵士はデマツ出身のジャワ人で質問の内容が理解できずに黙ったままだった。この沈黙はタラガ国軍に対する非難の態度と取られて、タラガ国の領主は激怒して喚きたてたが、直ちに最前列にいたデマツ兵に制止させられた。このことを領主は直ちに同国の王子の Aria・サリガン(Aria Salingan)に報告した。タラガ国と郡の軍とに対する恥辱を晴らすために Aria 王子がデマツ・チレボン連合軍の隊列に追いついた時騒ぎが再燃した。無断で連合軍の隊列がタラガ国に入ってきた理由を Aria 王子が知る前に、何の騒動が起きて隊列が止まっているのかを見るために前列まで進んできた シャリフ・ヒダヤットウラの姿を見たとき数人の自軍の兵士に言われ Aria 王子は攻撃を中止させた。同連合軍の隊列が意図せずタラガ国に入ってしまったと シャリフ・ヒダヤットウラは説明し、最前列にいたデマツ兵数人を殺してしまったことについて Aria 王子は陳謝した。シャリフ・ヒダヤットウラは Aria 王子に信仰告白をすることを勧め、同王子は自主的にイスラムに入信した。

チレボン王子の一行は、Aria 王子がイスラムに入信したことで戦闘を中止して王宮に来たことをタラガ領主に面会して伝えるためにタラガの宮殿に向かったが、彼らが到着した時には王は王宮から既に姿を消し、王女のマス・タンドウラン・ガガン(Mas Tanduran Gagang)も王宮におらず沐浴に出かけたことが知らされた。この時に王が王宮にいなかったという理由で Aria 王子がタラガの領主となり、その後 1529 年にはチレボンサルタン国に併合されたことで、タラガの国民たちはイスラムについて知るきっかけとなった。

4.20 1530 年のスメダン併合

1500 年代の初めに シーク・ダトゥ・カフィの子孫でありマウラナ・アブドゥラーマン(Maulana Abdurahman)の息子であるマウラナ・ムハンマド(Maulana Muhammad)²³がスメダン王国領内のチリトゥン(Cilitung)の東にあるラトゥン(Latung)川付近のシダン・カシ(Sidang Kasih)付近でダクワを行ったことがスメダン・ララン王国がチレボンサルタン国に併合された背景にあった。マウラナ・ムハンマドは同地の領主の一族であると言われていた Nyai Armillah と結婚してソレ(Soleh)という男子を得た。

²³ Maulana Muhammad は Maulana Yusuf の子供ではなかったか？

この子はプサントレン²⁴を卒業したのでサントリ(Santri)王子の名で大衆に知られている。

当時スメダン・ララン王国を支配していたトラクスマ(Trakusma)²⁵王のスティヤシ(Sutyasih)王女とこのソレ王子は 1530 年 10 月 21 日に結婚した。同王子は妃から同国の支配権を渡され、彼は後日戴冠して同国の領主となってクスマディナタ(Kusumadinata)と称した。その三か月後、チレボン王宮内のダラム・アグン・パクンワティにおいて同王子のスメダン・ララン王国国王への昇進とパジャジャラン王国の東部がチレボンの支配下に入ったことで祝典が催された。それはサカ歴 1452 年マルガシラの月の 12 日であった。

4.21 パジャジャラン王国との和平協定

スندا・クラパでの銃撃戦の後、チレボンサルタン国軍とパジャジャラン王国軍の間で数年間にわたり内陸部で銃撃戦が続いたが、1531 年 6 月 12 日に双方の間で和平協定が調印された。その時のパジャジャラン王はスラウィセサ候であり、一方のチレボンサルタン国は息子のモハンマド・アリフィン王子に行政を委譲したシャリフ・ヒダヤットウラが国を率いていた。

この和平協定の内容は次の通りであった。

- 各王国の尊厳と相互干渉しないことを承認する。
- 両国は同位置にあり、スリ・バドゥグ・マハラジャ(Sri Baduag Maharaja)であるシリワギ王国のジャヤデワタ王が兄弟国であることを承認する。

4.22 スナン・カリジャガ(Sunan Kalijaga)のデマツへの招致

1543 年にデマツのサルタン・トレンガナ(Sultan Trenggana)はスナン・カリジャガを同サルタンの宰相にすべくデマツ王国に招致しようとした。



Gan Si Cang
Sunan Kalijaga

²⁴ イスラム学校

²⁵ 別名パトゥアカン(Patuakan)

4.23 モハンマド・アリフィン侯の暗殺

チレボンサルタン国がバンテンとジャヤカルタ、チレボンから 7000 名の兵士を送り、三か月に及んだデマツ・チレボンサルタン国軍のパナルカン(Panarukan)包囲中に、サルタン・トレンガナは不慮の事件で暗殺された。



Tung Ka Lo
Sultan Trenggana

チレボンサルタン国からの兵士の中にいたポルトガルの探検家であるフェルナウン・メンデス・ピント Fernão Medes Pinto は自著のペレグリナサウン Peregrinação(旅行記)の中で 40 人の同僚と共に出征したパナルカンへの遠征について述べている。この探検家は 1545 年 10 月 1 日にゴアから中国に向かう途中で胡椒の仕入れのためにバンテンに到着したが、胡椒の在庫が不足していたのでその到着で数か月間待機せざるを得なかった。

三か月にわたる包囲戦の後、サルタン・トレンガナが開催したパナルカン包囲戦の継続の可否を領主たちと討議するために開いた会議でシリの葉を入れた容器で客をもてなしていた²⁶スラバヤ知事の 10 歳になる息子は、この会議の行方に興味を持っていたため同サルタンの命令を聞かずにその場にい続けた。それゆえサルタンは怒ってその子を殴りつけたため、この男の子は悔しさのあまり小刀でサルタンの背中から心臓に向けて刺したのでサルタンは即死し、遺体はデマツへ戻った。

フェルナウン・メンデス・ピントが「チレボンの聖なる支配者」(Quiay Ansedaa Pate de Cherbom)と題した記録は以下のように述べている。この暗殺事件の後でデマツサルタン国の覇権をめぐる騒動が起き、チレボンの知事に任命されていてデマツに滞在していたチレボンサルタン国皇太子のモハンマド・アリフィン王子(パサレアン侯)がチレボンのサルタンの代理を務めることになったが、同皇太子はこの騒動で暗殺されてしまった。しかしながら、サルタンに同行していた妃はこの難を逃れることができた。この騒動の一年後に、同サルタンの暗殺に影響された騒動がデマツで発生した。

また、故ユヌス・アブドウル・アル・イドウルス(Yunus Abudul al-Idrus)²⁷の妻であるラトウ・アユ妃と再婚

²⁶ このことから檳榔樹の実と石灰を混ぜてタバコ代わりにすることがされていたことが分かる。

²⁷ Sabrang Lor の別名

したファディラ・カン(Fadillah Khan)²⁸との間の子供である Ratu Wanawati とサウルガ(Sawarga)候との間に 1546 年にザイヌル・アリフィン王子が生まれた。

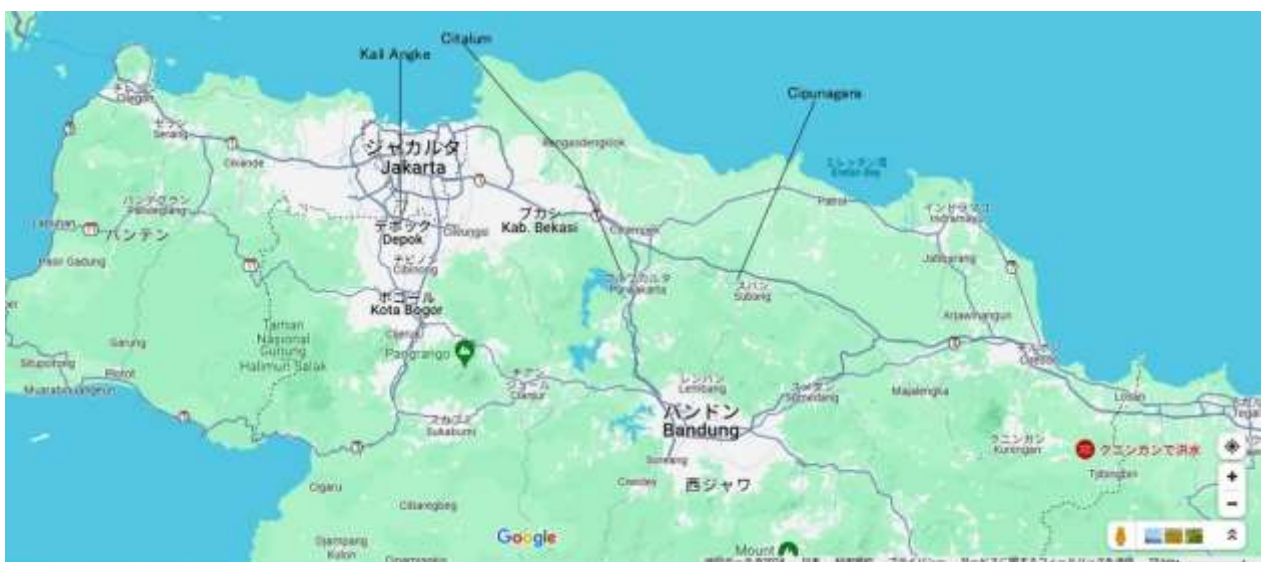
デマッサルタン国でのこの騒動では、サルタン・トレンガナの娘のカリニヤマト(Kalinyamat)妃の夫でありジェパラの郡長を務めていたハディリ(Hadiri)候も暗殺された。

4.24 モハンマド・アリフィンの死去に伴う会議

同王子の暗殺事件に対する態度を決めるための会議をチレボンサルタン国が開催した。当時バンテンサルタン国にてチレボンサルタン国の支配者であったシャリフ・ヒダヤットウラは 1552 年にチレボンサルタン国のバンテン地域の知事であったマウラナ・ハサヌディン王子を後日発展することになるバンテン地域のサルタンに昇格させることと、同サルタンが不在の間のチレボンサルタン国の統治のための副サルタンにファディラ・カン(ファタヒラ)を任命することでこの会議は結論を得た。

同年にマウラナ・ハサヌディン候が正式にバンテンのサルタン就任し、シャリフ・ヒダヤットウラはチレボンに帰還した。

4.25 バンテンとチレボン両サルタン国間での属領分割



チレボンサルタン国とパジャジャラン王国間の 1531 年の和平協定の後、上記のバンテンサルタン国

²⁸ Fatahillah の別名

の建国に伴い、アンケ(Angke)川とチプナガラ(Cipunagara)川に挟まれた地域は二つに分割された。バンテン史によると、シャリフ・ヒダヤットウラは15世紀にこの地域をチタルム河をその境として分割したとされている。すなわち、チタルム河の東側でチプネガラ川までの範囲で、現在のカラワン県とプルワカルタ県、スバン県の地域はチレボンサルタン国へ、チタルム河の西側でアンケ川までの地域はジャヤカルタという名でバンテンサルタン国の支配下に入った。

その後マウラナ・ハサヌディンは娘アユ・フィティマ(Ayu Fatimah)の夫であるカウイス・アディマルタ(Kawis Adimarta)をジャヤカルタの領主に取り替えた。同地で起きた1527年のジャヤカルタ攻略事件以来、カウイス・アディマルタの領主就任の1568年までこの地はファディラ・カン(ファタヒラー)の支配下にあった。

4.26 ファディラ・カン(ファタヒラー) (1568-1570)



シャリフ・ヒダヤットウラがダクワを通じてイスラムの布教に励んでいる間、チレボンサルタン国の支配者としてサルタンの代理を務めることになったファディラ・カン(ファタヒラー)宰相は副サルタンに就任し、シャリフ・ヒダヤットウラが没した1568年以降、ファ

ディラ・カンが1570年に没するまでの二年間だけではあったが公式にチレボンを治めることになった。スンブン山のジネム・アスタナ(Jinem Astana)王族墓陵²⁹にシャリフ・ヒダヤットウラの墓地と並んでファタヒラーは埋葬された。

²⁹ Gunung Jati 墓陵

第5章 チレボンサルタン国の繁栄と他国との友好関係の頂点

ファタヒラーの没後、王となるべき適格者が不在であったため、サウルガ(Sawarga)候の息子で、ファタヒラーシャリフ・ヒダヤットラの曾孫にあたる当時 21 歳であったマス・ザイヌル・アリフィン候に王位が継承された。ザイヌル・アリフィン候は即位後にパネンバハン・ラトゥ I 世と称して約 81 年間にわたりチレボンを治めた。

5.1 サルタン・ザイヌル・アリフィン(パネンバハン・ラトゥ I 世) (1570-1649)

同サルタンの治世下において、当時パジャン王国の支配下にあったマタラム王朝のキ・アグン・パマナハン(Ki Ageng Pamanahan)は 1578 年にオパツ(Opak)川のプロゴ(Progo)付近で王宮の建設を始めたが、1584 年にパマナハンが没したため息子で王宮の長であったダナン・スタウイジャヤ(Danang Sutawijaya)³⁰が王宮の建設を続行したと言われている。また、現在のスラカルタ/ソロ(Surakarta/Solo)市のカスナナン(Kasunanan)朝とヨグヤカルタ特別市のマンクヌガラ(Mangkunegara)朝の支配地域と想定されているパジャン王国のサルタン・ハディウイジャヤ(Hadiwijaya)も 1587 年に没した。当時同サルタンを快く思っていなかったダナン・スタウイジャヤではあったが同サルタンの葬儀には臨席した。ダナン・スタウイジャヤはその治世下で以下のように領土を拡大した。



Danang Sutawijaya
(Panembahan Senopati)

- パジャンはダナン・スタウイジャヤの領地となり、王子のブナワ(Benawa)候がパジャンの領主となった。
- デマツも同じく領地となってユワカ(Yuwaka)出身の人に支配された。
- ムノレ(Menorah)山西側地域のクドウ(Kedu)とバゲラン(Bagelan)
- マディウン(Madiun)は 1590 年にマタラム支配下に入った
- スラバヤ(Surabaya)
- クデイリ(Kediri)
- パラヒヤガン(Parahyangan)の東半分

³⁰ マタラム王朝創始者の Panembahan Senopati の異名



ザイヌル・アリフィン王の治世下で、チレボンとバンテン、マタラムの三サルタン国は親密な関係を維持していた。チレボンとバンテン両サルタン国の親密な関係は、シャリフ・ヒダヤットウラを祖とする親戚関係にあったこと、マタラムサルタン国との親密な友好関係はザイヌル・アリフィン王とマタラムの初代王であるダナン・スタウィジャヤとの親密な関係にあったからである。

5.2 マタラムサルタン国とチレボン市内のスロジャ(Seroja)要塞の構築

上の地図はイサーク・デ・グラーフ(Isaak de Graaf)³¹が作成したものであり、チレボン市内に 1690–1705 年に存在したパクンワティ宮殿の南と東側に現存している城壁が示されている。

マタラム王国のダナン・スタウィジャヤ王による領土拡大と征服が行われていた時期に、マタラムもチレボンサルタン国と親しい関係を結んでいたが、この関係は征服によるものではなく友好関係に依るものであった。下記のカチレボナン(Kacirebonan)文書ではチレボンの王宮要塞がスロジャ要塞と呼ばれていて、その建設工事にダナン・スタウィジャヤ王の支援を得たものとされている。

³¹ オランダの地図製作者



この当時、チレボンの市街は周囲に巡らせた城壁でとじられていて、その昔、山が砦となっていたジャワ島のようにチレボンでもこの城塞都市を脅威にさらすものはなかったのでマタラム国もチレボン城塞の建設を支援したものであろう。

オランダが初めて来航した 1596 年以前にチレボンの王都の城塞都市は建設され、来航三年後には、事実上チレボンに対するオランダの独占契約であった友好条約が締結された。1681 年にはこの城塞都市について広く知られていた。

マタラムのサルタン、アグン・ハニョクロクスモ(Sultan Agung Hanyokrokusumo [原文 Agung Hanyaraka Kusuma])³²は師匠であるチレボンのサルタン・マス・ザイヌルアリフィンにかわいがられた生徒の一人として言い伝えられているので、マタラムのサルタンはチレボンのサルタンを大変に尊敬していた。このこ

³² 別な多数のデータでは Agung Hanyokrokusumo であり原文の Sultan Agung Hayaraka Kusuma はスンダ人風な発音であろう。

とは、チレボンと良好な友好関係を常に維持するようにというマタラムのサルタン・ダナン・スタウイジャヤから子孫に対する遺言であったに相違ない。

ピーテル・ボウス(Pieter Both)のオランダ領東インドの総督の後に1619年にオランダ領東インドの総督になったヤン・ピーテルス・クーンを代表としてオランダはマタラムに使節を派遣した。マタラムは当時サルタン・アグン・ハニョクロクSUMO(1613-1645)に統治されており、このオランダ使節に対して同サルタンはバンテンとチレボン両サルタン国以外のジャワ島西部の全域はマタラムの領土であると伝えた。



Sultan Agung
Hanyokrokusumo
Sultan Danang Sutawijaya
(Panembahan Senopati)

1678年から1681年までオランダ領東インド総督を務めたライクロフ・フォン・フーンズ(Rijcklof van Goens)は1648年から1654年までの間にオランダ植民地会社(Vereenigde Oostindische Compagnie=VOC)からマタラムへ使節を5回派遣した。上述のようにダナン・スタウイジャヤ王の遺言でチレボンとは良好な友好関係を維持してきたので、ライクロフ・フォン・フーンズはチレボンが聖なる都市であると理解されていると解釈していた。

5.3 チレボンの少額通貨クプン(Kepeng)

チレボンで更に隆盛を続けた商業活動はサルタン・ザイヌル・アリフィンに、鉄と真鍮、青銅で作る少額貨幣の鑄造を決定させた。

5.4 ハリスバヤ(Harisbaya)事件

チレボンサルタン国とスメダン・ララン王国との衝突は1583年³³に勃発した。当時スメダン・ララン国王であったグサン・ウルン(Geusan Ulun)はザイヌル・アリフィン王の妃であるハリスバヤ妃をスメダンに

³³ 歴史家のウカ・チャンドラサスミタ(Uka Candrasasumita)は1588年という説を述べている。

逃がした³⁴とスメダン故事にある。ハリスバヤ妃とザイヌル・アリフィン王の間の子供であるスリヤディワガ(Suriadiwanga)は、その後のバタビア攻略でマタラムの味方となるスメダンの領主となった。

5.5 他地域との商業活動

- 1632年5月7～12日に砂糖と油、その他の必需品を積載したマレー船がチレボンからバタビアに到着した
- 1632年10月8日に油と黒糖、コメ、白インゲンマメを積載し船頭シムケジ(Simkeij)に指揮された20隻のジャンク船がチレボンからバタビアに到着した
- 1633年3月28日に西スマトラのティクウ(Tiku)³⁵から1000～5000ピクル³⁶の胡椒を積載した二隻のチレボン船が到着した
- 1633年4月16日にスマトラのブンクル州にあったスルバル(Selebar)王国から航行してきたサルタン・ザイヌル・アリフィン所有の二隻がサンゴ礁で座礁して破損した
- 1633年12月19日に砂糖とタマリンド、コメを積載した複数の船がチレボンからバタビアに到着した
- 1634年10月9日に砂糖とコメを積載してチレボンからバタビアに向かう船があった
- 1634年10月26日に砂糖とコメ、鹿肉、マンゴー、バナナなどを積載しチレボンからバタビアに向かう船があった。

5.6 チレボンにおける中国貨幣

1567年に中国皇帝が東南アジアを含む南海地域との商業活動禁止令を廃止した結果、ピチス

³⁴ ハリスバヤ妃は絶世の美女だったのでグサン・ウルンが盗んでしまった。

³⁵ パダンの北西約80kmにある港で近代までの交通の要衝であった

³⁶ 1ピクルは約60kg

(picis)と呼ばれた中国銅銭が大量に流入することとなった。1596年にジャワに最初にやってきたオランダ人グループは、ジャワ近辺諸島においてこの通貨が大量に流通していると述べている。中国銅銭による商業活動の活発化のため銅貨が大量に流出して、中国官僚が危惧した通り、中国では銅の需給がますます逼迫した。



このため 1590年に特に東南アジア諸島で流通させるべく安い錫製の硬貨が広東と福建で鑄造されたが、この新造貨幣は3~4年で破損してしまうため、欧州諸国の心配を掻き立てた。

この低品質の硬貨ピチスはジャワ島内まで流通し、バンテンの市場で流通している銅銭の四分の一しか価値がなかったこの硬貨で華人商人たちはバンテン内陸部で胡椒を買い入れていた。1613年から1618年までの間、ピチスが銀に対して高くなったことでバンテン地域ではピチス不足したため胡椒の売買を含めた取引に大量の銀が流入した。

上記の中国製の錫の通貨は低質な材料で作られているので破損しやすいという問題以外に、簡単に偽造できることと、英国とオランダが錫の供給元を発見するまで錫の供給不足がこの硬貨の現地製造に障害になったという問題が挙げられる。バンテンのイギリス人の注文で1608年には20トンであった錫が1614年には50~60トン、1636年には約150トンに達した。錫の大部分はイギリス人たちが弾丸を製造するために使われていた。錫製の硬貨はその後、バンジャルマシンとパレンバンさらにはバンテン地域で流通させるために輸送された。オランダは敵軍に弾丸製造材料を供給することになるのを恐れて彼ら所有の錫の売却には多くの注意を払っていた。

1633年にオランダは、錫をバタビアの華人商人に取引させるよう指令し、ジャワ島内、特にバンテンとチレボン、ジェパラにおいて中国硬貨の鑄造業者が存在していることを周知徹底した。また、オランダはインドネシアのオランダ支配地域にいる華人に専売で錫を与え、この中国硬貨の鑄造で利益を得ようと努めた。

5.7 シガ・バロン(Singa Barong)牛車の製作

H.B. Vos の「ジャワの宮廷馬車(Kratonkoetsen of Java)」によると、シガ・バロンはマス・ザイヌル・アリフィンの命令で 1649 年に製造されたものであり、馬ではなく牛が牽く設計であった。この牛車はアンカウイジャヤ王の設計



で、設計に導入された技術は宮廷官吏のグバン・スプ(Gegang Sepuh)がその長となり、カリウル(Kaliwulu)村のキ・ナタグナ(Ki Nataguna)が製作を担当した。

第6章 マタラムサルタン国との関係緊張とチレボン戦争、サルタン・アブドゥル・カリムの死去

6.1 チレボン戦争

チレボン社会でパガラグ(Pagarage)戦争として知られているチレボン戦争はチレボンサルタン国軍をバンテンサルタン国に送った結果の事件であった。

パジャン王国のサルタン・ハディウイジャヤが死去した後、マタラムサルタン国が 1588 年に歴史に登場しダナン・スタウイジャヤ王は領土拡大とマタラム東部地域において一カ国ずつ征服する領土拡大の承認を得るために外交を行った。一方、当時のチレボンサルタン国ではダナン・スタウイジャヤ王の親友であるサルタン・マス・ザイヌル・アリフィンが治世を敷いていた。バンテンサルタン国はその時にマタラムサルタン国の領土拡大を認めていなかったが、ダナン・スタウイジャヤ王は以前パジャン王国の一部であったマタラムは独立したサルタン国になったと宣言した。当時、バンテンのサルタンは9歳で1585年に即位したマウラナ・ムハンマド(Maulana Muhammad)はまだ12歳であった。

6.2 サルタン・マウラナ・ムハンマドの時代

サルタン・マウラナ・ムハンマドの治世の初期は、カリ・ニヤマト妃が育てた同サルタンの父親であるマウラナ・ユスフ(Maulana Yusuf)の兄弟のジェパラのアルヤ(Arya)侯の政治介入問題に忙殺されていた。このカリ・ニヤマト妃はデマツのサルタン・トレンガナの姉妹で、ジェパラの領主ハディリ(Hadiri)王の妻であったため、バンテンサルタン国に対して、マウラナ・ムハンマド皇太子が十分に成長して政治を取れるようになるまで自分がバンテンの支配者になるとアルヤ・ジェパラ侯は要求していた。しかしながら、ジェパラのアルヤ侯はバンテン以外の土地の人であると考えたバンテン高官達はこの要求を拒絶した。バンテンサルタン国の宗教裁判官カディ(Qadi)の支持を受け高官たちは皇太子をサルタンに昇格させた。同サルタンが十分な政治能力を持つ年齢までの間、ジャヤネガラ宰相とポンタン(Pontang)総司令官、キ・ワドゥアジ(Ki Waduaji)、ウイジャマンガラ(Wijamanggala)の四人の高官の支持で宗教裁判官がバンテン国の副サルタンに就任した。

この要求拒絶でアルヤ侯はバンテン攻撃を決心し、アルヤ侯は諸部隊とデマン(Demang)提督と共に

海路でバンテン国に向かったが、戦闘中にデマン提督は戦死したのでアルヤ候はジェパラに引き上げることとなった。

フセイン・ジャヤニングラツがバンテンとの関係を調査しているうちに、ダナン・スタウイジャヤがその存在を強調するためにジャワ島東部地域を征服し、またチレボンの城塞都市建設の援助を行っていた1596年に、マタラムがバンテンを攻撃するために15,000名の大軍をバンテンに送ったが失敗したことが判明した。この当時、マウラナ・ムハンマドはダクワで忙しかつたので1596年になってデマツのサルタンであったスナン・プラウト(Sunan Prawoto)の孫にあたり、アルヤ・プンギリ(Arya Penggiri)³⁷候の息子でマス・ザイヌル・アリフィン候(デマツのサルタン)からの提言で、バンテンのサルタンであるマウラナ・ムハンマドはようやくパレンバンへの軍事侵攻を決意した。この裏にはマス・ザイヌル・アリフィン候がパレンバンの領主になるという意図が隠されていた。19歳になったばかりのマウラナ・ムハンマドは戦死し、後日アブドゥル・ムファキル・マフムド・アブドゥル・カディル(Abdul Mufakhir Mahmud Abdul Kadir)という名で知られるようになる生後五カ月になったばかりのバンテン皇太子が残された。

6.3 サルタン・アブドゥル・カディルの時代

マウラナ・ムハンマドが没した後、まだ赤ん坊であった皇太子は直ちにバンテン国のサルタンに即位し、宗教指導者たちに指名されたジャヤヌガラ宰相を基とする代行機関が行政を執行した。同国の高官としてしられる信頼が高くサルタンに忠実な宰相はサルタンの代理としてその勤めを果たし、その間バンテンサルタン国は平穏であった。

³⁷ 別名 Pangiri

マウラナ・ムハンマドの没の二年後の 1598 年 11 月 28 日に海軍士官のヤコブ・コルネリスゾーン・フ



Jacob Corneliszoon van Neck

アン・ネック()に率いられ、ウェイブラント・ファン・ワルベイク(Wybrand van Warwijck)提督と有名な極地探検家ヤコブ・ファン・ヘームスケルク(Jacob van Heemskerck)一行が来航した。その当時にオランダとスペイン間で「80 年戦争」が勃発し Jacob Corneliszoon van Neck たため、オランダ政府が策定した極地探検計画を行ったヤコブ・ファン・ヘームスケルクが同行した。この間、オ



Huygen van Linschoten

ランダはポルトガルのリスボンから香料を購入しドイツとその周辺で売りさばいていたが、スペインがポルトガルを支配していた間はその支配地

域にオランダ船入港を禁止していたのでオランダは経済的に困窮していた。それゆえオランダ政府はア

ジアの香料の直接交易の方法を模索していた。しかしながら、オランダ船はイギリスとスペイン、この当

時スペインに支配されていたポルトガルの餌食となったため、この努力は

実を結ばなかった。アジアとインドの情報が記載されたヤン・ホイゲン・フ

アン・リンスホーテン(Huygen van Linschoten)著のイテネラリオ(Itenerario)

「東西インドへの航海に関する言説」が 1593 年に出版された時スペイン王

国の監視の目を逃れるためにオランダ政府はアジアへの代替ルートを探

すべく、同国政府による特殊設計の船で北極回り航路のアイデアが浮上

したが三回の探索はすべて失敗に終わった。この北極回りの航路探索で



Cornelis de Houtman

は船が氷に挟まれて寒さのために乗組員の半分が犠牲になり、ヤーコブ・ファン・ヘームスケルクと乗

組員たちは探索失敗の報告のためにオランダに戻った。この報告から、オランダ政府は南アフリカの喜

望峰を經由してアジアに向かう航路探索の調査団を準備した。コルネリス・デ・ハウトマン(Cornelis de

Houtman)が率いて香料ルート探索の為にアジアに向かおうとしたこの調査団にヤコブ・コルネリスゾー

ン・ファン・ネックが、またベルギー生まれの地図学者ペトルス・プランシウス(Petrus Plancius)も調査団

の一員となり、天文学者の指示に従い出帆した。ヤコブ・コルネリスゾーン・ファン・ネックの専門は商業

であり、航海分野には疎かったため彼は航海術を習得するコースに入った。スマトラとカリマンタンから

バンテンに入港しようとした香料輸送船が急襲され冷遇された 1596 年の前回のコルネリス・デ・ハウトマンの来航時とは異なり、今回のオランダの来訪はバンテンサルタン国で暖かく迎えられた。彼らがバンテンで胡椒を購入しようとしたとき、ポルトガル側はバンテンの人たちに高い値段を示して、コルネリス・デ・ハウトマン達には売らないようにそそのかし、真水のある場所への通行もさせなかったため、この一行は真水と食料、より多くの香料を得るためにスマトラに向かった。またこのオランダ人一行を逮捕させたが保釈金を払うことで解放されたことを恨んでコルネリス・デ・ハウトマンはバンテンに向かっている香料船を急襲した。

バンテンの社会で、ヤコブ・コルネリスゾーン・ファン・ネックとその友人たちの態度は他の外国人とは異なって優しいと言われ、当時まだ二歳であったサルタン・アブドゥル・ムファキルに謁見し、友好の印として黄金の脚があるカップを贈呈した。

1602 年にジャヤヌガラ宰相が没し彼の実弟がその後を継いだ、以下のように品行不良という理由で 1602 年 11 月 17 日に罷免された。一方、サルタンの実母であるニヤイ・グデ・ワラノギリは王宮貴族のひとりであるチャマラ候と再婚し、チャマラ候をサルタンの後見人にするべく画策した。チャマラ候がサルタンの後見人になった後、彼は賄賂を取るように脅されたためバンテン国の一派を利するような諸外国の商人たちと商業契約を交わすようになった。バンテンの国民と政府高官たちはこれに不満を持ち、更にはオランダあるいはポルトガルの外国商人たちが起こした騒動がバンテンサルタン国内で発生した。

後見人である宰相の存在はすでにバンテンサルタン国の高官たちの眼中にはなく、この宰相の権限を王宮とその周辺だけに制限したと言われている。1604 年にジョホール(Johor)から来航したマウラナ・ユスフ候の息子マンダリカ(Mandalika)候のジャンク船が逮捕される事件が起き、このジャンク船を解放するという宰相の提案は無視されてしまった。マンダリカ候は宰相の支配に反対する諸侯と国民の側であったかれらは町の外に砦を作って立てこもったが、1605 年にイギリスの支援を受けたジャヤカルタ候の攻撃でこの砦は陥落した。サルタン・アブドゥル・ムファキルの割礼の儀に臨席するために軍を率いたジャヤカルタ候がバンテンに到着した時、宰相は彼に支援を求めた結果、バンテンサルタン国とマンダリカ候との間で和平協定が締結され、マンダリカ候は六日以内

に家族 30 人を連れてバンテンサルタン国から退去しなくてはならなかったと言われている。

マンダリカ候事件の後の 1608 年には下流域を意味するパリール(Palir)の乱が発生した。この乱はラナマンガラ(Ranamanggala)候が率いる宮廷側の諸侯と、クロン(Kulon)候と高官達の一味との間で発生したものであった。実は、この乱はラナマンガラ候たちが宰相チャマラ候を暗殺するために団結したことに起因したのであった。マンダリカ候の事件の後、バンテンサルタン国の状況は好転せず、各地域の諸侯たちは各々の地位を守るために武装化にいそしんだ。武装化のために彼らはしばしば商船を襲い、商人たちにバンテンサルタン国は交易に安全ではないという認識を与えた。それゆえ、1608 年 6 月にバンテンの都での交易は終了したと述べたオランダ商人 Jacques I' Hermitre の証言のようにバンテンサルタン国での交易が停止する状況に影響した。

その後、同国の苦境を打開すべくラナマンガラ候とマンドウラ(Mandura)候、クロン候、シガラジャ候、ユダヌガラ(Yudanegara)のトゥバグス・クロン(Tubagus Kulon)、ユダヌガラ領主などによって開催された会議で、バンテンサルタン国の混乱は宰相がバンテンサルタン国のためにならない政策をとったことから始まり、指導者の不在までが同宰相の間違いによるものであることで決着を見た。この問題の原因となったとして宰相を暗殺することで意見が一致し、ラナマンガラ候とマンドウラ候と宗教裁判からのその身の安全保証を得る事で宰相暗殺はユダヌガラ領主に一任された。

1608 年 10 月 23 日、ユダヌガラ領主は王宮を焼き討ちしたため、サルタン・アブドゥル・ムファキルを宮廷に残したまま宰相は逃亡した。サルタン実母の夫である宰相であり、同宰相はサルタンの継父として最高の仕事をし、サルタンの教育に全責任を負い、高官達と共にサルタンとの会議に同席したとはいえ、彼は素晴らしい性格を形成できなかったのみならずバンテンサルタン国のためにならない政策をとったので、当時まだ青年だったサルタンは同宰相と親しくかつまた好意を寄せていたとはいえ、宰相と部下の書記たちは王宮外でユダヌガラに暗殺されてしまった。

この暗殺事件の後、ラナマンガラ候がこの事件に関して会議を開こうとしたことがきっかけでサルタンの体調が悪化して継父に置き去りにされたことで深い失望感にさいなまれるようになった。以前には宰相暗殺に賛成したクロン候とシガラジャ候、トゥバグス・キドウルはこの会議に欠席し、

王族たちも出席を拒否したため、会議に臨席したのはラナマンガラ候とウパパティ(Upatih)候と諸高官だけであった。この会議で実行犯として死刑を宣告されることを恐れたユダヌガラはクロン候に会うことになった。チレボン出身のグバン(Gebang)候と結婚したラトウ・ウイナオン(Ratu Winaon)の長子であるサルタン・マウラナ・ユスフの孫にあたるクロン候をバンテンのサルタンにすることを支持すると、ユダヌガラと部下たちは表明した。これがパリル事件の発端になった。

パリル事件は四カ月余り続き、クロン候側についた王国の高官達と港灣長、更にはクリン(Keling)人³⁸のアンダモヒ(Andamohi)は港の付近に守備のために砦を築いた。クロン候は裏切ったり戦いに参加しようとしなかった人たちとその一族を殺すことに躊躇せず、内紛に加担しなくなかったため船を使って逃亡しようとしていたキ・ウィジャヤ・マンガラー族を皆殺しにした。

パリル事件は、当時劣勢にあったクロン候からの依頼でジャヤカルタ候が仲介に入り、話し合いで決着した。この戦闘でクロン候側はキ・ジャジャカ・トウア(Ki Jajaka Tua)と呼ばれるバンテンの大砲を鹵獲したと言われているがこれは創作によるものではないだろう。

砦の上から観戦していたまだ13歳のサルタンが始めた戦闘はクロン候側がバンテンの中心部から撤退するという条件で終息した。1609年2月にクロン候側についたアンガバヤ(Anggabaya)司令官と港灣長のその他の軍勢8000名はジャヤカルタを目指してバンテンを出発した。1617年になって初めて彼らはバンテンへの帰国を許されたが帰国後かれらにはなんら政治的立場を与えられなかった。パリル事件の後ラナマンガラ候はバンテンの副サルタンに就任した。事件の発生理由とその背景から、クロン候の8000名の軍隊の発動は1608年3月8日から26日であったと考えられる。この事件における戦闘は同年10月か11月まで続いたがクロン候の撤退により、翌1609年2月の和平調停でその幕を閉じた。

パリル事件の後、ヨーロッパの商人たちが交易だけではなく国内問題にも介入していたと就任した副サルタンは考えて、ヨーロッパの商人たちと接触していた前副サルタンが発した規則に関して規制と調査を行い、特にバンテンからの出荷物に対して租税を引き上げた。

³⁸ インド人と思われる。

6.4 ジャヤカルタのサルタン空位とオランダの浸入

パ ril 事件の一年後の 1610 年に VOC はピーテル・ボウスをジャワ島の総督に昇格させた。VOC の商業活動のためのビル建築用地探すとともに、東インド全体の海路のハブとなる地点を獲得することがこの総督の任務であった。ヤコブ・コルネリスゾーン・ファン・ネックの交易使節の派遣以降オランダはしばしばバンテンで交易品を購入・蓄積していたので、上記の商業ビル建設候補地として同総督は当初バンテンサルタン国を選択していた。しかしながら、同地の支配者の妨害が発生することと、ラナマンガラ副サルタンが発布する新しい規則を懸念したため、同総督は同年に候補地をジャヤカルタに変更した。

ピーテル・ボウス総督はジャヤカルタ地域を支配しているウイジャヤクラマ候と会議を開き、契約草案の法的なプロセスと共に、石造の住宅と事務所、倉庫を建てるためにチリウン川の東岸に一区画の土地を購入することについて話し合われた。この契約は 1611 年に締結され、チリウン川の東岸に 50 x 50 vadam (4,700m²)の土地代金として 1,200 リアルがジャヤカルタ候に支払われたが、契約書の最初の文章の二番目の句は同総督の下で VOC が意図的に変更したので、契約条件を守らなかったという理由で後日バンテンサルタン国を攻撃する口実となった。土地の譲渡に関する規定、例えば国防に関してジャヤカルタにも適用されていたバンテンサルタン国の法律規定では土地はサルタンの所有に属すが、その状況に応じてその目的は柔軟に変え、また一定の期間その土地を利用することができる述べているが、この契約書の内容の差がジャヤカルタ候と同総督の間で異なる見解を生じさせた。外部から圧力がかかったにせよ、初期の会議の内容と異なる条件であり、VOC のこの作為的な行為により、土地の所有権はサルタンから VOC に移ることになり、最終的には VOC がこの土地を獲得した。

VOC が獲得したこの土地はカリ・ブサールの下流域のワツ・ティン(Wat Ting)を長とする華人集落に隣接し、その東側には 1611 年にジャヤカルタのウイジャヤクラマ候の宰相となったキアイ・アリア(Kyai Aria)長とする現地人集落に隣接していた。同総督はアブラハム・トゥネマンス(Abraham Theunemans)に命じて、石材と木材で 31.5 x 11.4 m の倉庫を建てさせ、この倉庫は 1613 年に完成した。カリブサール下流域の東側に建てられた倉庫はナッサウ(Nassau)と名付けられた。このカリブサールはジャヤカルタ候の宮殿の東側にあるチリウン川の支川であり、その対岸は現地人集落であった。



Laurens Reael

1614年11月6日に任期を満了したピーテル・ボウス総督の後継者として、その翌日に石叻会社のオーナーである息子の Pieter Reijnst を伴って赴任した商人でありニーウエ・コンパグニー(Nieuwe compagnie) (ブラバンシエ Brabantsche)のオーナーの一人であるゲラルド・レイスト (Gerard Reijnst)³⁹が総督の地位についた。1615年に前総督は四隻の船団を組んで帰国する途上のモーリシャス付近、詳しくはフリック・エン・フラック(Flic en Flac)の沖合で事故に遭い、前総督の乗船した船ともう一隻が沈没した。ゲラルド新総督は前総督に比べて態度が悪かったと言われている。

新総督は赤痢にかかってしまったために、多数のことは実行できず1615年12月7日に没したので、オランダはローレンス・リール(Laurens Reael)を次期総督に任命し、ローレンス・リールは1616年6月16日にオランダ領東インド総督に就任した。同総督は1617年にチリウン川岸にマウリティウス(Mauritius)を建てた。この新総督は本来公平な人であり、原住民対策とマルクに入り込んでいた商売敵の英国商人に対する VOC の方針に反対していた。同総督とステフェン・ファン・デア・ハーゲン(Steven van der Hagen)海軍提督にとって、原住民への攻撃や征服は行うべきではなく、外国への攻撃は有効な国際法に従って行われるべきものであり、VOC の目的と成功は通商と外交を通じてのみその目的に到達できるものであった。VOC との基本方針の差がローレンス・リール総督を1617年10月31日に辞任を決意させることになった。後任のヤン・ピーテルス・クーン(Jan Pieterszoon Coen)が着任後に初めて総督の地位を明け渡したとともに、ローレンス・リール総督はオランダ議会と VOC の首脳部に対して、再三にわたり彼の要求と地位を回復するための書簡を送った。

1618年に前任者よりずっと厳しい姿勢を取るヤン・ピーテルス・クーンが総督に選任され、木材と石材で作られた仮の倉庫は土手で強化された。その直後にこの建物のすべての角に意図的にジャカ



Jan Pieterszoon Coen

³⁹ Gerard Reijnst が正しい綴り

ルタ候の支配地域に向けた砲台として使える構造物を構築した。さらには、修理と貯蔵機能を持つ小さな港湾施設と教会、病院をジャヤカルタの島に作った。

事実上これらの構造物は、恒久的な建物を作らないという前総督ピーテル・ボウスとジャヤカルタ候間の契約に反しているのだが、当初は「仮の」マウリティウス倉庫は新総督によって永久設備に改築されてしまった。オランダが売買契約の内容を一方的に変更したことはバンテンまで知られるようになった。ジャヤカルタ候はこの契約違反事項を減らそうとし、このオランダの建物から道路を挟んで反対側にあったイギリス商館と協同する可能性を打診しようとしたため、オランダはこのイギリス商館を攻撃した。この戦闘で英国側からの反撃を受けたオランダは戦死者 15 名負傷 10 名を出して敗北した。この事態を見たオランダ総督クーンはマルクに逃亡したのでオランダ資産の支配権はピーテル・ファン・デン・ブルック(Pieter van den Broecke)に移ったが、ジャヤカルタ候はこのピーテル・ファン・デン・ブルックを逮捕するに至った。この逮捕事件の情報がバンテンに届いた時ラナマンガラ副サルタンはこの措置に賛成せず、直ちにジャヤカルタ候をバンテンに呼び戻したとともにジャヤカルタ地域の支配権を彼から一時的に剥奪した。

バンテンに召喚されたジャヤカルタ候ウィジャヤクラマがジャヤカルタからバンテン北部の海岸地域のタナラ(Tanara)地区に配置転換されたことは間違えた政策であったと当時考えられていた。パリル事件の後の方向として、副サルタンは厳格に法律を適用して欧州の商人たちへの課税を強化した。副サルタンが間違いと認めた、特にマウリティウス倉庫に対するウィジャヤクラマ候の行為に対して法令順守を強制したことは、副サルタンとその一派がウィジャヤクラマ候をそれほど好いていないという強い疑念を人々に抱かせた。ウィジャヤクラマ候がバンテンでの衝突事件の仲裁者になって以来、彼がバンテンを更に困難に追い込む一味に加担したと解釈された。パレンバン遠征上でのサルタン・マウラナ・ムハンマドの暗殺に関わったと考えられたマス・ザイヌル・アリフィン候の行為はバンテンの多くの人に嫌悪感を与えた。このマス候は、後日自分の息子に殺されることになるのだが、召喚の後で直ちにジャヤカルタに向かい、同地に住む許可を得ようとした。バンテンサルタン国の一部で仲裁者とみなされていたウィジャヤクラマ候の存在は、その他の事件を含め、バンテンサルタン国との間の軋轢を長期化する原因となった。バンテン側の調査によるこの一連の事件は、マウリティウス倉庫事件に対して引責させ

るというより、このマス候の陰謀でウイジャヤクラマ候がバンテンに召喚されたとする理由の裏付けとして理解されている。

フンビン・ウイジャヤクスマ(Hembing Wijayakusuma)教授の 1740 年の大虐殺⁴⁰に関する論文ではこう述べている。ウイジャヤクラマ候がバンテンに召喚されジャヤカルタの支配権を喪失する前に、同候とピーテル・ボウス間の合意事項に基づく契約草案を VOC は再度編集し、VOC の倉庫に接近している華人集落を VOC が撤去する許可を与えるという点を変更した。当時、華人集落の長であったワツ・ティンは当初の合意の際の通訳兼証人であったため、バンテンがジャヤカルタの支配権を取り戻した時にバンテンの副サルタンはワツ・ティンを暗殺した。

ヤン・ピーテルス・クーン総督がマルクから同地の VOC 総司令部の艦隊の庇護を受けて 1619 年 5 月 30 日にジャヤカルタに戻ってきた時、ジャヤカルタ候ウイジャヤクラマがバンテンに召喚されたためジャヤカルタの政治体制が緩んでいたため、ヤン・ピーテルス・クーン総督は自分の利を得るためにジャヤカルタ地域を副サルタンの手から奪い取ることを考えた。その後ジャヤカルタに帰還したウイジャヤクラマ候は変容に気づきオランダと戦ったがオランダ側の勝利に終わり、ウイジャヤクラマ候は現在のジャティネガラ(Jatineraga)で没した。

この戦いで勝利したヤン・ピーテルス・クーン総督は直ちにジャヤカルタ地域を自分の出身地の Hoom から取った Niuew Hoom という名の都市城壁を建設した。しかしながら、この街には VOC 全盛期になってから、ローマ時代に使われていたオランダ人の呼称であるバタヴ(Batav)人の土地を意味するバタヴィア(Batavia)の名が使われるようになった。上述のフンビン・ウイジャヤクスマ教授は、バタヴィアの名は民族の英雄を意味するバタ/バト(bata/bato)の居住地を意味するという説を唱えている。地名としてのバタヴィアはジャヤカルタだけではなくアフリカや南米スリナムの旧オランダ植民地にもつけられている。

⁴⁰ バタヴィアの狂暴。参照 http://omdoyok.web.fc2.com/Ah_Indonesia/Aind-81/Aind-81.htm

6.5 オランダのバンテンにおける交易の独占

オランダがジャヤカルタを支配した後、オランダは VOC を通じて胡椒を初めとしたバンテンでの交易独占を画策したので、バンテンに寄港しようとする商船に対するオランダの妨害もバンテンにおける胡椒価格の低下に影響を及ぼした。

6.6 サルタン・アブドゥル・カリム/パネンバハン・ラトゥ II 世(Sultan Abdul Karim/Panembahan Ratu II)

1649年にサルタン・ザイヌル・アリフィンがなくなった後、その孫のラスミ(Rasmi)侯、別名アブトウル・カリムがチレボンサルタン国の行政を取り仕切った。これは同サルタンの父王であるスダ・イン・ガヤム(Seda ing Gayam)侯、別名パネンバハン・アディニクスマ(Panembahan Adiningkusumah)侯が先に亡くなっていたためである。後世においてパネンバハン・ギリラヤ(Panembahan Girilaya)侯、あるいはパネンバハン・ラトゥ II 世と呼ばれたラスミ侯は、後日亡父の称号であるパネンバハン・アディニクスマを使った。

このサルタン・アブドゥル・カリムの治世において、チレボンサルタン国はバンテンとマタラムの両サルタン国の支配力に挟まれていた。マタラムのアマンクラツ(Amangkurat) II 世はサルタン・アブドゥル・カリムの養父でもあったため、バンテンはチレボンがマタラムに接近しているのではないかと懸念した。一方のマタラムではチレボンのサルタン・アブドゥル・カリムとバンテンのサルタン・アグン・ティルタヤサ(Ageng Tirtayasa)がシャリフ・ヒダヤットウラの子孫であるがゆえ、チレボンが本当にマタラムに接近しているかどうか疑念を抱いていた。

1681年に締結されたオランダとチレボンとの友好条約の三年後の1684年10月1日付の在チレボンオランダ領事の手紙にはサルタン・アブドゥル・カリム(ギリラヤ)事件について以下のように記されている。サルタン・アブドゥル・カリムの即位1649年の直後の1650年頃に、マタラムのアマンクラツ I 世はコタグデにある自分の王宮でアブドゥル・カリムのサルタン就任を祝うために、アブドゥル・カリムとマルタウィジャヤ(Martawijaya)とカルタウィジャヤ(Kartawijaya)の二人の息子を招待した。この祝宴の後、アブドゥル・カリムと二人の息子はチレボンに戻ることを禁じられてマタラムで生涯を過ごすことになった。メーソン・ホードリー(Mason Hoadley)によると、サルタン・アブドゥル・カリムは1666年に没したとあるが、

ムルタンガ(Mertasinga)物語によると、同サルタンは 12 年の捕囚後の 1662 年に没したことになる。

上記の捕囚は海岸地域の領主に対するアマンクラッ I 世の政治方針であり、同じ方法がマドゥラ島のバンカラン(Bangkalan)にあったアロスバヤ(Arosbaya)王国のトガ(Tengah)王の息子のプラスナ(Prasena)王子に対しても取られた。トガ王が亡くなった四年後の 1624 年にマタラムはアロスバヤ王国に攻め入り、幼少のプラスナ王子に代わって王国を統治していた先王の弟であるマス(Mas)候はデマツに逃亡し、プラスナ王子はマタラムに送致され、マドゥラ島の西半分の領主チャクラニングラツにされたが、プラスナ候は領主であった間もサルタン・アブドゥル・カリムと同様マタラムで無為に時間を過ごした。

ヨグヤカルタのギリラヤの丘にあるプラスナ候の墓地はバントウル(Bantul)県イモギリ(Imogiri)にあるマタラム王家の墓所に近く、ギリラヤとイモギリにおけるいくつかの伝承によるとどちらの墓所も同じ標高にあるということである。

6.7 ワンサクルタ(Wangsakerta)候によるチレボンサルタン国の行政

サルタンと王子たちがマタラムに幽閉されていた間、チレボンサルタン国は支配者不在により激しい動揺に見舞われた。チレボン王宮には上記の二人の王子以外に、別腹の弟ワンサクルタ候が存在した。二人の兄はサルタン・アブドゥル・カリムとチレボンの貴族の子孫である母との間に生まれ、バグス・ジャカ(Bagus Jaka)と呼ばれていたワンサクルタ候は同サルタンと一般庶民出身の母との間に生まれた子であった。チレボンサルタン国を混乱から救うべく、バンテンのサルタン・アグン・テイルタヤサは、父であるサルタンが帰国するまで、ワンサクルタ候を副サルタンにするよう進言し、王族はこれを承服した。

6.8 カラワンのオランダへの割譲



Trunojoyo

マタラムのサルタン・アグン・ハニヤラカ・クスマの没後の後継者のアマンクラッ I 世はオランダに対してより柔軟な姿勢を見せ、両者の相互支援協定も締結され、トゥルノジョヨの反乱の際に乱の平定の為にマタラムはオランダからの支援を要請した。後日総督となるコルネリス・スピールマン(Cornelis Speelman)に率いられたオランダ軍はジェパラの港湾長のワンサディパ(Wangsadipa)を通じて、チプヌガラ川北部



から河口までオランダ支配地域を拡大するという条件を提示した。この提案はジェームス・クーパー(James Cooper)⁴¹が 1677 年 3 月 4 日にマタラムのサルタンに届け、サルタンと王子たちはこれを受領した。これはトゥルノジョヨがマタラムの都を 1677 年 6 月 28 日に奪取し、捕囚されていたチレボンサルタン国の二人の王子を解放したする数カ月前のことであった。

この条件とはオランダが要求した地域の一部であるカラワン地域にあるランカス・スメダン⁴²(Rangkas Sumedang)地区の割譲であった。この地区はチレボンサルタン国の領土であったにもかかわらずアマンクラッ I 世はこれに同意したため、チレボンの諸侯は海岸地方の西半分をオランダに割譲することでチレボンの安全保障として耐えざるを得なかった。

サルタンの空位に加えて、サルタン代理だけで治世を行っていたチレボンの地位は弱体化しており、アマンクラッ I 世へのオランダの支援という圧迫のため不法にオランダに奪取されたカラワン地区の奪還はできなかった。それゆえ、チレボンの二人の王子がバンテンに戻って来てカスプハンとカノマンの名でカラワン地区を失ったチレボンサルタン国を継承することとなった。その結果、チレボンサルタン国の支配地域の最西端はチプヌガラ川を境としたカンダン・ハウル(Kandang Haur)地域とその周辺部のみ

⁴¹ 歴史家の Sartono Kartodiharjo によると Jacob Couper とのこと。

⁴² Citarum 河と Cibeet 川から現在 Karawang 県と Purwakarta 県、Subang 県の Cipunegara 川まで

になった。

6.9 スメダンのクスマディナタ IV 世(ランガ・グンポル III 世)がカラワンの所有権を主張

スメダン領主のクスマディナタ IV 世は先祖のアンカウイジャヤ・ビン・ラデンソレ候⁴³が主張したようなスメダン・ララン王国地域再支配の夢を持っていた。ジェームス・クーパーの仲介で 1677 年 3 月に締結されたアマンクラッ I 世と VOC との間の協定でマタラムがその支配力を弱めているとクスマディナタ IV 世は考えたので、クスマディナタ IV 世はまずカラワン地区のパマヌカンに、続いてチアスムとチパラグに侵攻し、チパラグに自軍を駐屯させた。

この侵攻以前にも、カラワン地域を奪還すべくスメダンへの支援要請のためにクスマディナタ IV 世はバンテンサルタン国に近づいたことがあった。以前、スメダン王スリアディワンサ(Suriadiwangsa)I 世の息子であるスリアディワンサ II 世を王位継承問題の件で侵略したことがあったバンテンサルタン国は快くその申し出を受け入れたが、VOC とマタラムへのバンテンの攻撃の際にはクスマディナタ IV 世がバンテンを支援するという交換条件を付けた。当時バンテンは VOC とマタラムへの攻撃で兵力を分割することは困難であったからである。しかしながらクスマディナタ IV 世はこの条件を拒否したため、同王はバンテンとも敵対関係に陥り、バンテンの攻撃への準備を行わざるを得なくなった。

スメダン・ララン国のクスマディナタ IV 世の母であるニヤイ・チュカン・グデ(Nyai Cukang Gede)はアンカウイジャヤ王グサン・ウルンの妃であり、ラトゥ・ハリスブアヤ⁴⁴は当時身ごもっていたチレボンのサルタン・ザイヌル・アリフィンの息子であるスリアディワンサ I 世の母であったので、同王を継父であるこのアンカウイジャヤ王は我が子のように考えていた。

クスマディナタ IV 世は現状を見据え、VOC の無知に付け込んで、バタビアからインドラマユ迄の両道を提供する条件でチパマヌカン(Cipamanukan)⁴⁵の河口を守備して欲しいと 1677 年 10 月 25 日に VOC へ書簡を送った。この河口はすでに VOC の所有地となっていたので、實際上、同王はいかなる自国領

⁴³ Kusumadinata II 世、あるいは Prabu Geusan Ulun

⁴⁴ Harisbaya 妃は Angkawijaya と再婚した時にはチレボンの前サルタン・ザイヌル・アリフィンの妊娠 2 カ月だった子供を宿していた

⁴⁵ Pamanukan 町を貫通しているのは Cipunegara 川であり、Cipamanukan の名は同王の策略によるものかもしれない。

地を VOC に提供することはなかった。

6.10 カラワンへのオランダ遠征隊派遣

VOC がカラワンを支配した後の 1677 年 11 月から 12 月にかけて、バンテンとマカサル、チレボン、スメダンの脅威から同地を守るために VOC は守備隊を送った。

1678 年 1 月から 3 月にかけて、VOC はエベルト・ヤンツ(Evert Jansz)を使節団長としてスメダンに派遣した。これとほぼ同時の 3 月 10 日にバンテン軍がムアラベレス(Muaraberes)⁴⁶とタングラン(Tangelang)⁴⁷を経由してスメダンに向かった。

1678 年 5 月に VOC は Willem Hartsinck をカラワンへ、Muller をスメダンに使節として派遣した。5 月初旬にバンテン軍はスメダンに到着しており、バンドンの知事ウィラ・アグンアグンとスカプラ(Sukapura)とパラカン・ムンチャン(Parakan Muncang)の軍事支援を得て一カ月にわたってスメダンの町を包囲していた。

同年 6 月に、バンテンのサルタン・アグン・ティルタヤサは、自身の皇太子であるアブ・ナスル(Abu Nasr)別名ハジ・バンテン(HajiBanten)候に対抗するための軍が必要であったので、スメダンを包囲していた自軍を呼び戻した。撤退途中のバンテン軍をスメダン軍は追撃し、トゥガル(Tegal)の戦いでバンテン側の司令官が戦死した。

1678 年 7～9 月になり、新たにオランダが獲得したカラワン地域に対するバンテンとチレボンサルタン国からの影響を防ぐ壁としてスメダン国を利用すべく、VOC はヨアヒム・ミセルシュ(Joachim Michielsz)⁴⁸をスメダンに送った。

⁴⁶ Muaraberes は Bogor 北方約 10km の地点

⁴⁷ ジャカルタ特別州の西に接する町

⁴⁸ 別な綴り方では Joachim Michiefs

第7章 バンテンサルタン国ゲリラ、ヤコブ・ファン・ディック使節、チレボンサルタン国の分割

7.1 トウルノジョヨ反乱軍の侵攻とマタラムへの属国拒否宣言

プカロガンが 1676 年 12 月 25 日にトウルノジョヨの支配下に入り、海岸地域の領主シガワンサ (Singawangsa) はトウルノジョヨの反乱軍に加わったと、同年末にバンテンに入港したチレボン船が伝えた。

1667 年 1 月 2 日にはトウルノジョヨはトゥガル(Tegal)を無血で支配下にいった。

1667 年 1 月 5 日、トウルノジョヨの叔父にあたるガベヒ・シンドウカルティ(Ngabehi Sindukarti)とガベヒ・ランラン・パシル(Ngabehi Langlang Pasir)に率いられたトウルノジョヨ軍は 12 隻の船に 150 人の兵士を乗せてチレボン港に到着し、港湾長としてのチレボン駐在のマタラム代理大使マルタディパ(Martadipa)を降伏させて次の条件をのませた。

- ① チレボンは今後一切マタラムに対して税金を払わないこと
- ② マドゥラ軍は婦女子を保護すること
- ③ マタラムには今後一切人質を送らないこと
- ④ チレボンは独自の王の治世下にあること
- ⑤ チレボンはバンテンのサルタンの権利保証下にあること
- ⑥ チレボン人はバンテンのサルタンを庇護者として認めるとともにバンテンに武器援助すること

拒否されることを考え、上記の条件は脅迫めいた内容になっていたため、高齢であったマルタディパはトウルノジョヨ侯の名で出されたこの条件を最終的に受諾し、サルタン・アブドゥル・カリムに近い子孫と血縁者たちに支配権を返還した。

7.2 チレボンのサルタン・アブドゥル・カリムの子供たちのサルタン就任

バンテンサルタン国からの武器援助を得てトウルノジョヨがマルタウィジャヤとカルタウィジャヤの両

王子をマタラム捕囚から1677年救出した後の1679年にバンテンのパクワティ王宮で彼らがチレボンのサルタンに就任した時にチレボンサルタン国の分割は実施された。どちらの王子がチレボンサルタン国を継承すべきかについて王族内に異なる意見があったことから王族内部の分裂を避けるために、バンテンのサルタンアグン・テイルタヤサはこの三王子をチレボンの支配者とするために、やむを得ずチレボンサルタン国を二分して両王子の所領とし、サルタンの代理であった腹違いの弟のワンサクルタ候を新設した宮廷の高級教育機関の長とせざるを得なくなった。ワンサクルタ候は所領こそなかったが、王宮の決定に関する権利は保持することになった。

この決定はチレボンサルタン国内で新しい競争を構成することになりサルタン国が三つに割れて各々が権威を有して、互いに退位させようとする動きになった。正式な即位後の三人の称号は次のとおりである。

- マルタウィジャヤ候はカスプハン(Kasepuhan)サルタン国の王になり、称号はサルタン・スプ・アビル・マカリミ・ムハマド・サムスディン(Sepuh Abil Makarimi MYhammad Samsudin)で在位期間は1679-1697年
- カルタウィジャヤ候はカノマン(Kanoman)サルタン国の王になり、称号はサルタン・アノム・アビル・マカリミ・ムハマド・バドウルディン(Anom Abil Muhammad Badrudin)で在位は1679-1723年
- ワンサクルタ候はチレボン公(Panembahan Cirebon)になり、称号はアブドゥル・カミル・ムハンマド・ナサルディン(Pangerang Abdul Kamil Muhammad Nasarudin)別名トパティ(Panembahan Tohpati)で在位は1679-1713年。



Kaprabon

マルタウィジャヤ候とカルタウィジャヤ候はチレボンのサルタンに就任することをバンテンのサルタンに認められたので各々はサルタンとして全権を持つ領地と領民、王宮を持ったが、腹違いの弟であるワンサクルタ候はサルタンにはならずパネンバハンのままで、領地も王宮もなかったが、

王宮の知識人に対する高等教育機関カブラボン(Kaprabon)、別名パグロン(Pagron)を創設しその長に

おさまった。

7.3 ライクロフ・フォン・フーンズ使節がバンテンサルタン国を崩壊させる

1678年1月4日にライクロフ・フォン・フーンズはヨーン・マーツサイカー(Joan Maetsuycker)の後任の総督に指名され1679年1月31日に新総督はオランダ政府宛に次の書簡を送った。

「我が国の発展に最も重要なのはバンテンサルタン国を崩壊させ、その支配力を払拭することであり、バンテンを倒すか、VOCを弱体化させるかのどちらかである。」

7.4 対等な関係と1681年協定でのオランダの侵入

チレボンのサルタン・アブドゥル・カリムの三人の息子はバンテンのサルタンの承認を得てそれぞれの地位が確定したが、実際には彼らの中では不満がくすぶっていた。カスプハン王朝を支配する長男のマルタウィジャヤ候はサルタン・スプ・シャムスディンとなったが、自分が長男であることから、正式に王位継承権を有すると考えていた。彼ら三兄弟の間の確執は、バンテンのサルタンが三人の地位について調整を計ったのみで、各々に対して確定的で合意済の領地の徒支配権の分割を行なったことが原因となった。

マルタウィジャヤ候はVOCの使節団長のヤコブ・バン・ディック(Jacob van Dyck)に対して、チレボンサルタン国の王位継承運動を支援して欲しいと伝えた。これは弟たちのカルタウィジャヤ候とワンサクルタ候からの反対意見を生じさせることになった。カルタウィジャヤ候は彼の兄と同時にチレボン地域の支配者として王位についたという見解であったので、同候はバンテンサルタン国の庇護を求めるようになった。さらに父王と二人の兄がマタラムに捕囚されていた間行政を取り仕切っていたワンサクルタ候は自分がサルタン代理としてチレボンサルタン国を治めていたことから、自分自身もチレボンの支配権を有すると主張した。

7.5 バンテンサルタン国のインDRAMユのオランダ倉庫襲撃

1679年にバンテンサルタン国は、アルヤ・スルヤ(Arya Surya)とラトウ・バグス・アブドゥル・カディル(Ratu Bagus Abdul Qadil)の指揮下でインDRAMユにあるVOCの倉庫を襲撃した。この襲撃はVOCとジ

ヤワ島の一味⁴⁹に対するバンテン側のゲリラ戦であった。

7.6 ヤコブ・バン・ディックと1680年のオランダ書簡

このゲリラ戦に対処するために VOC はチレボンサルタン国を攻撃するためにバタビアから軍隊を派遣した。1680年9月にバンテンのゲリラ隊がオランダ派遣軍に壊滅の憂き目を見せられている時、マルタウィジャヤ侯が支援を望んでいた VOC の使節団長のヤコブ・バン・ディックは、VOC 同候の王位継承を支援するという書簡を送った。この書簡は調停者としてのオランダ王国最高評議会の決定書であり、VOC はチレボンの支配者たちを派閥を問わず諸王として認めているという趣旨であり、同最高評議会はチレボンの諸侯をオランダ支配地域の支配者に任命することで庇護するという約束をした。

この時、ライクロフ・フォン・フーンズ総督とコルネリス・スピールマンを長とする顧問たちはチレボンの三人の支配者たちに送る条約を起草していた。この条約文は1680年10月29日に総督に指名されたコルネリス・スピールマンに承認された。尚、コルネリス・スピールマンとその一味による反抗に対してライクロフ・フォン・フーンズの総督側には対抗手段が辞任以外にはなかったという背景があった。

1679年にすでに提出していたライクロフ・フォン・フーンズの総督の辞任要請は、1680年10月29日に VOC の「17人会議」からの書簡で受理された。この書簡では、「17人会議」は彼の辞任を尊厳を持って認め、VOC への貢献への賞賛として、同氏の息子が当時オランダ領スリランカの総督であったライクロフ・フォン・フーンズ Jr に最高評議会の議席を与えた。

7.7 ハジ・バンテン候とチレボンでのバンテングリラ活動の終息

このゲリラ戦の最中、自分自身にバンテンのサルタンの王位継承権がないのではないかというハジ・バンテン候の懸念が引き金となった内部紛糾に父親であるバンテンのサルタン・アブドゥル・ファタ (Abdul Fath)、別名サルタン・ティルタヤサは直面していて、この内部紛糾はコルネリス・スピールマンが総督に任命された時にその頂点を迎えた。

ハジ・バンテン候は1680年11月25日に同総督に対して総督就任の祝辞を送った。VOC がチレボ

⁴⁹ マタラムのことと思われる。

ンサルタン国全域を支配することに影響を与えることになったチレボンにおけるゲリラ戦に VOC が勝利したばかりであったので、この祝辞はサルタン・アブドウル・ファタの懸念の引き金となった。

7.8 1681 年協定

1680 年末、オランダの最高評議会はチレボンの支配者に対する条約文書を批准し、1681 年の新年にバタビアに滞在していた三人の支配者から構成される七人の使節がライクロフ・フォン・フーンズの公邸で行われたヤコブ・バン・ディックが主催した国政行事に臨席した。スペインワインでオランダ国王の健康に乾杯した後、最高評議会で批准された書簡がチレボン側に贈り物と共に手渡された。その夕方にチレボンの使節を乗せた船と共にヤコブ・バン・ディックは二隻の船でチレボンに向かって出帆し、この一行は四日後の 1 月 5 日にチレボンに到着し、祝砲とすでにチレボンに駐屯していたヨアヒム・ミセルシュに迎えられた。

翌 1 月 6 日に宮廷前広場で祝砲を伴うマルタウィジャヤ候とカルタウィジャヤ候などの有力者が臨席する儀式が行われ、バタビアから運ばれた 1681 年 1 月 1 日付のオランダ最高評議会の決定書が読み上げられた。

翌 1 月 7 日にはチレボンの支配者たちの会議が開催され、その夜にオランダとチレボンの間の条約を批准することで意見が一致した。この条約にはチレボン側は上述の三人の領主が署名し、オランダ側の代表はヤコブ・バン・ディックとヨアヒム・ミセルシュであった。この平和協定の趣旨とは、チレボン地域でのチーク材を含む木材とコメ、砂糖、胡椒のオランダの独占売買とチレボンの諸侯をオランダの傘下に入れる事であった。この条約は住民による交易と航海を制限するとともに、同地におけるオランダの権益を実行する VOC の地位を確立した。

第8章 植民地時代とインドネシアの独立

この出来事の後、オランダ植民地政府はチレボンを直接コントロールして政治にますます介入してきたので、チレボンサルタン国における行政体制としての王宮の役割がますます希薄になり、その頂点は1906年と1926年であった。面積が1,100haで、20,000人の人口を有するチレボン地域に対するサルタン国の支配権がこの時に公式消滅した。1942年にはチレボン地域の面積が2450haまで回復している。

独立時代、チレボンサルタン国の地域はインドネシア連邦共和国の一部となり、チレボン市とチレボン県を含むサルタン国の旧領域は市長と県知事がそれぞれ治めることになった。

第9章 文化の中心としてのチレボンサルタン国

チレボンサルタン国はイスラムを感じさせる多数の芸術や文芸の基盤となりイスラム教の輝かしい中心となってきた。チレボンの昔話には通常プゴン(Pegon)あるいはジャウィ(Jawi)文字で書かれた物語が収録されている。その内容は、歴史、王の系譜、演劇、宗教、祈禱、イスラムの話、暦の解説書、医学書、呪文、逸話、伝統、おまじない、恋愛に関する教への13種類に分類される。チレボンの昔話にも二つの王宮の援助により宗教専門家が書いた神秘学に関する記事が掲載されている。宮廷以外にも、カルタウィジャヤ候のカノマン王国の宗教裁判官カディであるキ・ムコイイム(Ki Muqoyyim)が創設したプサントレン・ブントツ(Buntet)のようなチレボン地域の複数のプサントレンでもこれらの昔話はアルクルアンやフィキ(Fiqi=イスラム生活の手引き)とともに見ることができる。このように、宗教教育から始まり、法律や恋愛問題に至るまでの人生の問題にかかわるすべての事項を網羅した昔話が多数存在するゆえに、チレボンサルタン国は文化の中心として呼ばれているのである。

第10章 チレボンのサルタン一覧

- シャリフ・ヒダヤットラ(スナン・グヌンジャティ)公、在位 1479—1495年はチャクラブアナ侯が支配権を委譲したチレボン初代の支配者であり、この時代にパジャジャランを屈服させた。
- パサレアン(Pasarean)公、別名モハンマド・アリフィン公は即位前に没したのでサルタンはスダン・カムニン(Sedang Kamuning)がサルタンを継ぐこととなった
- アノム・チャルボン I 世(スダン・カムニン侯)は即位前に没した。
- ファタヒラーことサイイツ・ファディラ・カン(Sayyid Fadhillah Kan)公、在位 1568-1570 年はチレボンのサルタン II 世と称号した。ファタヒラーはシャリフ・ヒダヤットウラの娘婿であり、**シャリフ・ヒダヤットウラの死後の 1568 年**にサルタンになり、1570 年に没するまでの二年間パクワギ王宮における政治の長となった。
- パネンバハン・ラトゥ I 世(マス・ザイヌル・アリフィン)公、在位 1570 - 1649 年はチレボンのサルタン III 世と称号した。この人はスダン・カムニン侯の息子であり、妃はパジャンのサルタン・アディウィジャヤの王女であった。
- アノム・チャルボン II 世(スタ・イン・ガヤム侯)は即位前に没した。
- パネンバハン・ラトゥ II 世(パネンバハン・ギリラヤ)公、在位 1649 - 1666 年はチレボンのサルタン IV 世と称号した。この人はアノム・チャルボン II 世の息子であった。

パネンバハン・ラトゥ II 世は 1677 年に没し 16 年間のサルタンの空位が続いた時期にはバンテンとマタラムの影響を強く受けた。亡き王の息子たち間で支配権をめぐる騒動が発生したため、1678 年にチレボンサルタン国は兄が支配するカスプハンと弟が支配するカノマンの二つの王国に分割された。

チレボンサルタン国の分割後、カスプハン王朝は後日サルタン・スプ I 世となるシャムスディン・マルタウィジャヤ(Syamsudin Martawijaya)を名乗る長子のパネンバハン・ラトゥ II 世が率い、カノマン王朝は後日アノム I 世となる弟のムハンマド・バルドウルディン・カルタウィジャヤ(Muhammad Badrudin Kartawijaya)公が率い

た。(完)

嗚呼、インドネシアの目次へ戻る	「チレボンサルタン国」の表紙へ戻る
---------------------------------	-----------------------------------